

爆撃

野口昂著

398.8
N93



0058129000

2

0058129-000

398.8-N93ウ

爆撃

野口昂・著

新興亜社

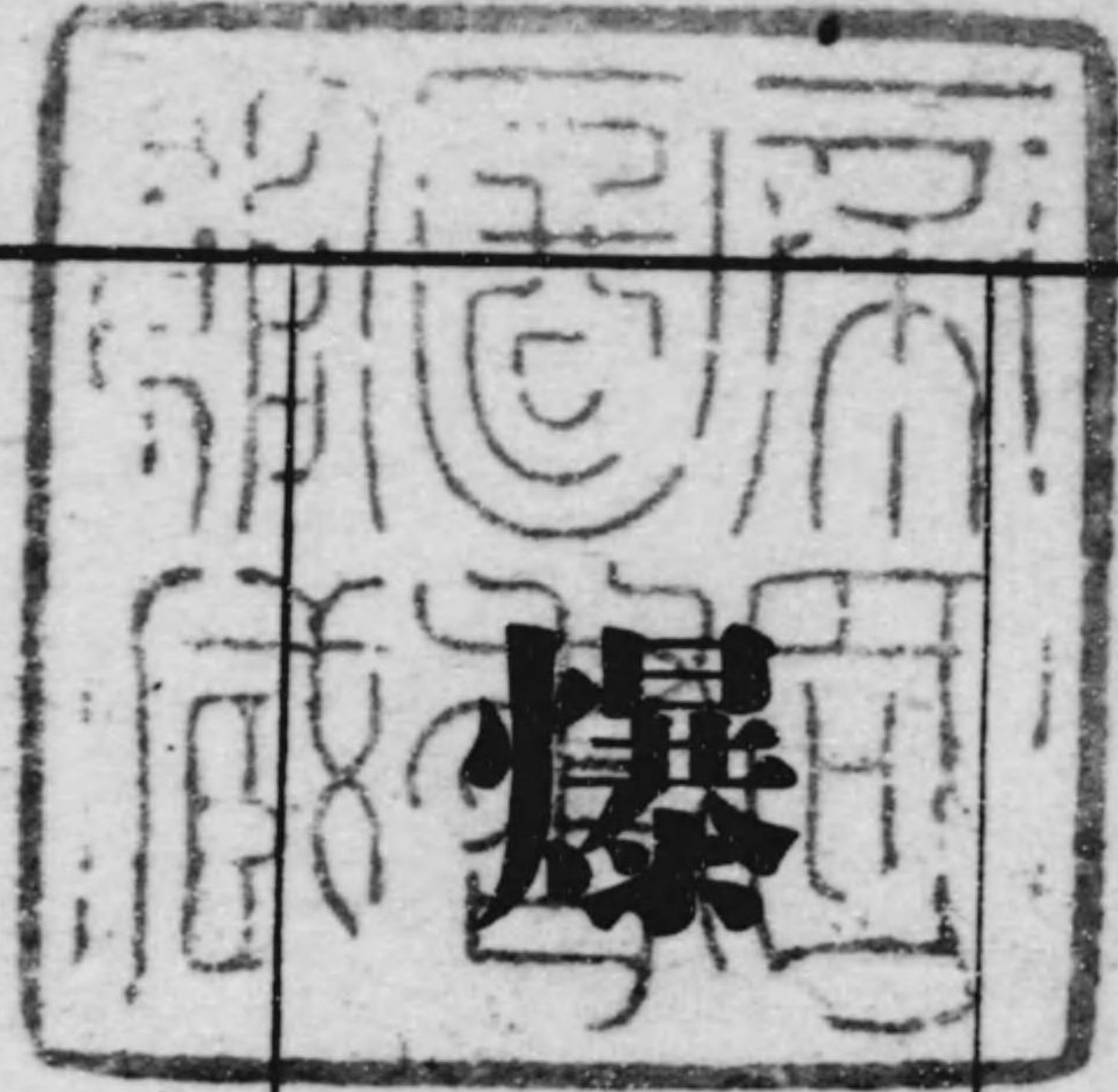
昭和16

AJH

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第67条の規定に基づき、平成12年3月23日
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです

F 470

398.8
N93



野口
昂著

擊

新興亞社發行



929
86

序に代へて

皇紀一五一八年、史上最初の世界一周を試みたポルトガルのマゼランは、南米の東端を経て太平洋に船首を進め、そこに波しづかなる萬里の大海原を見出し、「マール・パシフィック平和なる海よ」すなはち太平洋と名づけたのである。しかし、いま遂に太平洋の平和は、反樞軸國家群の手によつて破られ、こゝに凄絶な戦火の舞臺と化した。畏くも、昭和十六年十二月八日、米英に對する宣戰の大詔は渙發せられたのである。人類の歴史はじまつて以來五千年、太平洋が國家民族の決戦舞臺と化したことは、まさに今回をもつて最初とすることはいふまでもない。しかも、近代戰の特徴通り、その火蓋は空中爆撃戰によつて切られたのである。

海陸軍の空の精銳が緒戦劈頭、太平洋の空を長驅して、西南太平洋の制空權を掌握した結果、敵空軍の蠢動する餘地なからしめたことは、一億國民の快哉する

932
32

目次

序に代へて	一
空中爆撃の歴史的回顧	一
航空機と空襲思想	一
ベニス攻圍戦と空中爆撃	四
空戦に對する國際法規の發生	九
飛行機による爆撃の濫觴	三
前大戦と都市空襲	三六
大戦直前の軍事航空	三六

ところではあるが、長期戦化と共に敵空軍の蠢動なしとは断じ難いのである。神州三千年の歴史は、われ等の父祖が常にこれを清浄に保つて今日にいたらしめた名譽の輝き以外になにもものでもない。

假りにそのことありとなせば、その損害を最少限度に止めることが敵に勝利を得る一つの手段である。空中爆撃戦時代には、戦線後方こそ望むところの戦場である。しかりとすれば、銃後國民の死所も亦戦場である。

空襲に怯えて敵に脊中をみせる國民の一人でもあつたら、これは叩つ斬るのが戦場の例ひである。銃後も亦軍人同様名譽の死場所となつた。焼夷弾、地雷弾、その百萬を敢て怖れないのである。

昭和十六年十二月八日

米英宣戦布告の放送を聴きながら、謹んで御召を待ちつゝ。

一等飛行機操縦士 野 口 昂

空中爆撃の開始……………三一

パリールに加へられた空襲……………三四

英本土及びロンドンの空襲……………四三

聯合軍側のドイツ空襲……………五二

大戦初期における空襲の實況……………六三

爆弾と防空の過去現在……………七二

爆弾と爆撃法の進歩……………七三

空中化學戦の問題……………七八

防空の發達……………八八

眞剣な列強の國民防空……………九六

近代の爆撃機と第二次大戦……………一一五

航空技術の進歩と爆撃機……………一二五

爆撃機の裝備と任務……………一二三

日支事變と世界驚異の渡洋空襲……………一三六

第二次大戦の勃發と爆撃戦……………一三六

A B C Dの爆音と大東亞制空權……………一四八

米國の對日攻勢と敵性航空路……………一四八

わが南進航空路と東亞制空權……………一五六

A B C D對日空軍の動向……………一五九

太平洋の空とアメリカ空軍……………一六八

對米英宣戰布告と國土防衛……………一七五

太平洋決戦の火蓋と大空襲……………一七五

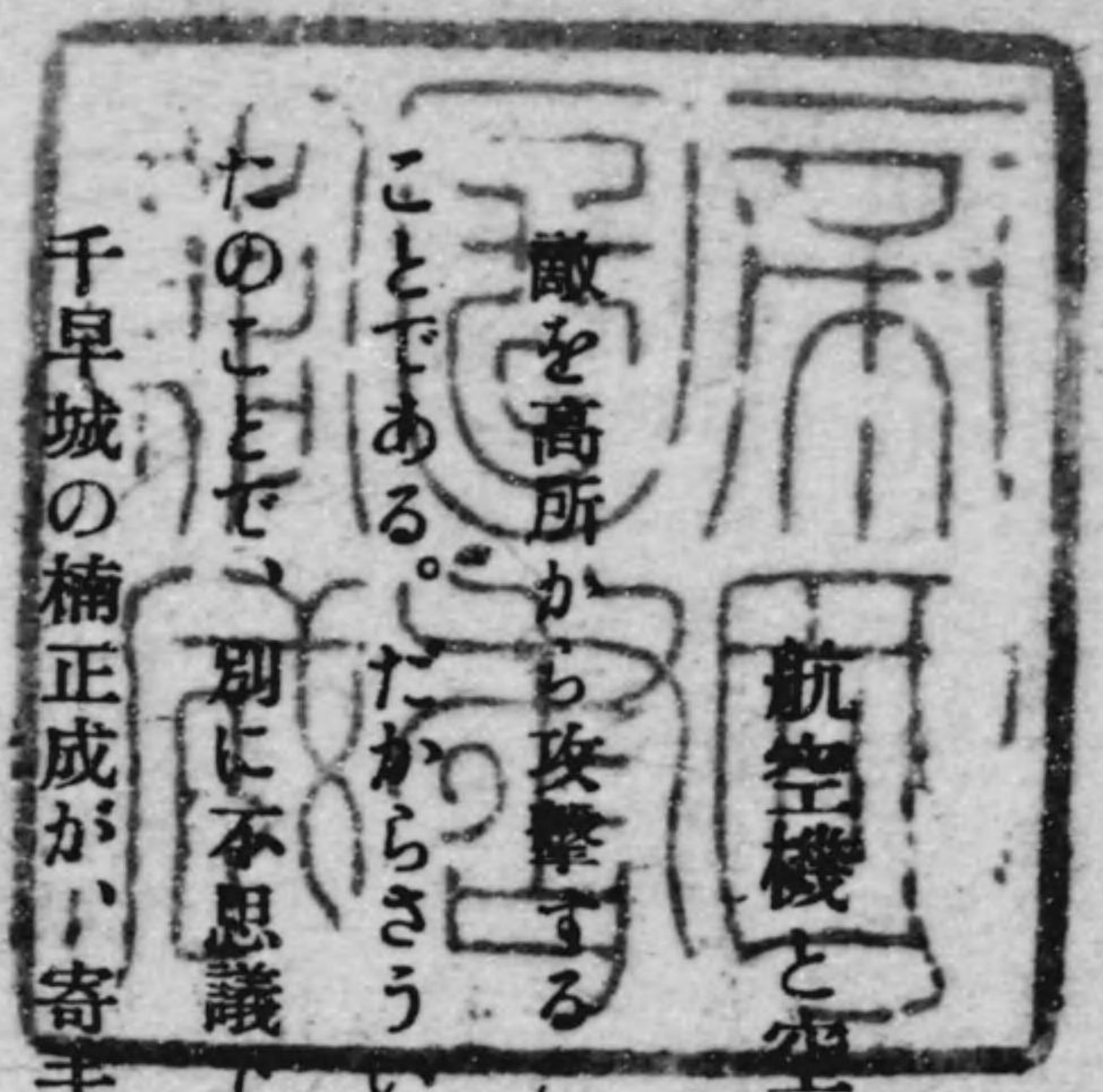
ハワイ大空襲の戦果と歐洲戦の比較……………一七九

一舉太平洋制空權の掌握……………一八六

長期戦と米英軍用機の再検討……………一八八

國土防衛と全國の青少年……………一九五

空中爆撃の歴史的回顧



敵を高所から攻撃することの有利なことは三歳の童子でも本能的に知つてゐることである。だからさういつた思想は人類の歴史はじまつて以來五千年のこのかたのじつで別に本思議でもない。

千早城の楠正成が、奇手の賊軍に熱湯や石塊を投じて大いに奇勝を博したと傳へられるやうな思想は、人類の争闘史上東西古今にわたつてかぎりない事實である。かういつた實際に直面して、人間は空中からの攻撃がいかにも有利であるかを考へたかは知れないが、それは一片の空想であつて、航空機の誕生に資するな

ものでもなかつた。

したがつて、航空機は空中飛翔といふ鳥類への羨望、いひかへればロマンチックな夢の實現であつた。そして、その實用化と共に、はじめて高所から攻撃することを有利とする思想に結びつけられたのである。最初は、風が利用された。しかし、それは簡単な偵察に用ひられたものであつて、積極的な攻撃用具ではなかつた。

飛行機は、一九〇三年の十二月、米のライト兄弟の手によつて初めて征空史の第一頁が染められ、こゝに今日における航空時代いひかへれば空軍絶對時代を現出するにいたつたのである。しかし、空襲の歴史を語る上には、なほ後日の問題であつて、實際には、氣球の誕生こそ、空軍發生の礎因であつたことを忘却することはできない。のみならず人類が待望の空中飛行を最初に行ひ得たといふ歴史的事實も亦これによることはいふまでもないのである。

氣球は、最初、大火袋といはれ、わが日本では風船と呼ばれた。この大火袋の最初の發明者は、フランスのモンゴルフィエといふ紙屋の息子、ジョーセフとステファンの兄弟で、一七八二年のことであつた。その最初の搭乗者は、ジャン・ピラトール・ド・ロージエといふ佛人であつた。兄弟の實驗を試みた氣球は、最初熱空氣によるものであつたが、ほどなく佛人チャールズ教授等の研究による水素瓦斯を填充するものとなつた。

爾後、氣囊の研究や自由飛行の研究がつみ、英佛海峡の横斷も行はれるようになるに及んで、こゝにはじめて自由氣球が偵察とか連絡用として軍事の用に供されることになつたわけである。したがつて、空中爆撃の歴史もまたこゝにはじまることはいふまでもない。

爆撃とか空中戦の歴史は、誰でも飛行機が出現してからのことだと思つてゐる。しかし、これは誤りである。といふのは、世界最初の爆撃飛行と空中戦こそ、實に、自由氣球によつて、その第一頁が占められるものである。

最初の計劃者は、ロシアであつた。一八一二年、ナポレオン軍がモスクワを攻略したときのことである。露軍は、大自由氣球をつくり、これに火薬と霰弾とを満載し、時計仕掛によつて空中で爆發せしめ、ナポレオン軍を粉碎しようとする計劃であつた。しかし、この奇抜な計劃は、氣球製作が間に合はなかつたのと、佛軍が猛烈な寒氣と飢餓に襲はれて、モスクワ攻略を斷念して敗走した結果、その實現を見ずして終つたのである。

これより三十七年後の一八四八年に、オーストリー軍がイタリヤの水の都ベニスを攻略したときに、空中爆撃は初めて實際に試みられた。しかし、この奇抜な壯舉は、充分に將味性のある然も勝れた戦法だつたにも關はらず、當時の人々は

この奇策に對して、一時、驚嘆したばかりで、つひに深く研究も行はれず全く黙殺されてしまひ、わづかに歴史を語る古書と古畫に、そのおもかげを傳へてゐるに過ぎない。即ち今から九十四年のむかし、フランツ・ウカチウスとヨオゼフ・ウカチウス兄弟共に、オースタリーの砲兵中尉の奇策によつて、水都ベニスは空中から爆彈の洗禮を受けたのである。

一八四八年三月、イタリヤ各地は、オースタリー政府のあまりの壓制に堪へかねて、これより開放せられんがための義勇軍が旗を擧げ、次第に擴大強化していつた。これがために叛軍の鎮壓のために出動した奥軍との間に衝突流血の慘を惹起したのである。

ベニス市では、ダニエル・マロンを指揮者として奮戦につとめたが義勇軍の戦は利あらず、ツルン中將麾下の軍勢のため次第に壓迫され、五月二十六日、マルヂェラの要地を失ひ、つひにベニスは全く包圍せられて孤立するにいたつた。そ

して、包圍軍からは、再三のやうに降告の勸告が發せられたけれども、頑として應じなかつた。しかも彈藥糧食共に缺乏して、その苦しみは言語に絶する有様であつたが防戰大いにとつめ、晝夜、攻圍軍の猛攻にも怯まず防備を完ふしつゝあつた。

一方、攻撃する側の塙軍の砲撃は、大砲の射程距離が義勇軍の立籠るベニスの要害に達することがすくなく、前面の水上に落下して濛々たる水煙を上げるばかりであつた。したがつてこれは防禦軍の物笑の種となるばかりでなく、かへつて防禦軍の士氣を鼓舞する始末であつた。

かういふ状態は、かれこれ二ヶ月も續いた。そして、塙軍の死傷者は、既に、七百餘名に上つたばかりでなく、更に陣中にはコレラが猖獗して、多大の戦闘人員を失ひ、これがため攻圍軍自身にも正に危機が振りかゝつて來つゝあつた。

この間、ウ兄弟は、しばしば司令官ツルン中將に對し、氣球による攻撃の有利

を上申したが默殺の運命に逢つた。しかし、再三の意見具申の結果、つひにこれを採用せられるところとなつたので、兄弟のよろこびは、この上もない有様であつた。そこで兄弟は直にセルゲエラ壘壁の下に敵の眼を避け、かねてのプラン通り空襲の準備を開始した。

七月二日の朝、風は敵陣の方へ都合よく流れて、空中攻撃に絶好の状態を示した。これまでに準備の全く完成した新しい攻撃部隊は、命令一下、先づ第一の氣球が中天にのぼり、次で、第二第三と三つの氣球が昇騰していつた。見れば第一の氣球には、黒い物體が懸吊され、三つの氣球はワイヤーによつて連結され、最後にウ兄弟の乗込んだ大型の氣球は、朝日を浴びながら敵味方共に啞然としてゐる中を靜かに昇騰しつゝ風に送られて敵陣の方角に流れていつた。

第一の氣球が敵陣の上空に達したとき、ウ兄弟の氣球に連絡する引綱が引かれこの氣球の吊されてゐる黒い物體、即ち五十封度の爆彈は、風を切つて敵壘に落

下、濛々たる土煙を上げて轟然と爆音をとどろかしたのである。

かうして史上最初の空中爆撃は成功が收められた。そして、この有様を眺めた味方からは大喝采を受け、敵軍は、この奇襲に呆然自失の體で、敵味方共に大變な騒ぎとなつた。この第一回の飛行は三十五分間に亘るものであるが、引續きその日の午後には第二回目の空襲が敢行され、爆弾も二倍を運び、益々その威力を發揮したのであつた。

司令官のツルン中將は、この奇襲の大成功に最もよろこんで、爾後、毎日六回の空襲を命じたのであつたが、しかし、この空襲にも一つの強敵があつた。これはどうにもいたしかたのない問題で、即ち風がこのみの方向にばかり吹いて呉れないことであつた。

したがつて、このために空しく幾日も待機を餘儀なくされた結果、ウ兄弟は、軍艦からの攻撃、或は、他の場所に移動して決行する計畫に懸命となつてゐた。

その折柄、奇想天外ともいふべき空中の攻撃に懲りたゝめか、叛軍の士氣が振はず、つひにマロンの率ゐるベニスの市民軍は白旗を掲げるにいたつたので、その再度の機會は遂に失はれてしまつた。

しかし、この新しい攻撃方法の發明者である彼等の功績は、まつたく黙殺されてしまつたばかりでなく、後續する研究者も現はれなかつた。自然、空襲の發達は、飛行機や飛行船の實用化されるにいたるまで、一時、休止されることになつたのである。

空戦に對する國際法規の發生

世界における空中爆撃の淵源は、即ち前に述べたベニスの攻圍戦をもつて、その第一頁を染めるものであるが、爾後、氣球の發達とその軍事的利用とは、空戦に關する國際條約を取結ぶ機運を醸成した。

先づ最初に法典の編纂を行ったのは、アメリカであつた。一八六三年以後、「米國軍從軍中ノ教令」として發布してゐるが、この教令の規定するところは、たゞ米軍にだけ實施せられるもので、ひろくこれを國際間の契約にまで進展せしめる効果を發揮すべきものではなかつた。

その五年後の一八六八年に、セントピーターズブルグにおいて軍事會議が開催され、十二月十一日の宣言が決議された。即ちヘーグの第一回平和條約である。この宣言によれば、先づ空中から投下する爆裂彈の使用を禁止し、かつ戰爭の目的からかんがへて當然非戰鬥員を苦しめたり、又は非戰鬥員を死にいたらしめるやうな兵器の使用は制限すべきであつて、かういふ兵器の使用は人道に反するといふ趣旨のものであつた。そこで條約は、その第五十七條第一項において、「交戰國ハ軍用トシテ四〇〇瓦以下ノ榴彈又ハ燒夷彈或ハ爆裂彈ヲ投下使用スルヲ禁止ス」と規定したのである。

この條約の上において四〇〇瓦以下の爆彈の使用を禁止して、それ以上の重量に及んでゐないのは、どういふ論據に基いたものであるものか、その判断に苦しむところであるが、この缺陷が第二回の平和條約において是正されてゐるのは當然であらう。

氣球の搭乗員が今日でいふ偵察者、即ち密偵として取扱はれ、氣球に對する射撃、對氣球射撃の特種火砲の製作が防禦上最良の策としてみとられるにいたつた機運を醸成したのは、一八七〇—七一年における普佛戰爭であつて、新な問題が惹起されたからであつた。

即ち、パリイは普軍の包圍に遭つて、その陥落が寸前にせまつた折柄、この危機を救ふための奇策として、佛軍は友軍に對する氣球連絡を企圖したのである。一八七〇年九月二十三日の朝、その最初の氣球はサン・ペレの廣場から多數の郵便物を搭載して、ジュリス・デュロフといふ勇士の操縦によつてパリイの空高

く昇騰することに成功し、普軍の頭上をかすめて三時間二十五分といふ當時における最大記録の飛行を行ひ、コラコンヴァイルに下降し、立派に第一回の連絡飛行に成功したが、これは實に世界最初の航空郵便でもあつた。

この航空連絡には、史上に有名な獨眼龍の勇士ガンベッタもこれにあたり、パリ開城にいたる間には百五十四人の者が一個に對し一人乃至三人搭乗して、總計六十八個の氣球によつて多量の郵便物や傳書鳩を載せて普軍の包圍を突破することに成功したのである。この際、氣球によつて城外に運ばれた傳書鳩が、おどろくなかれ二萬五千餘回の返信をパリ城内に運んでゐるのである。

しかし、氣球連絡は、航空そのものが既に冒険であつた。しかも地上には雲霞のやうなプロシヤの大軍が蟻の這ひ出る隙間もないほど取圍んでゐるのである。自然、氣流の都合では低空を漂ふ場合もあつて、地上からの射撃を受けたわけであつた。この結果、四個の佛軍氣球が撃墜せられ、世界最初の撃墜記録が止めら

れたのである。

新たな問題とは、即ち搭乗員の身上に關するもので、即ち、氣球搭乗者に對する攻撃は非人道的行爲であるといふ佛軍の猛烈な抗議のそれであつた。しかし、これはいかにも西歐流の身勝手なもので、むしろ抗議者側の乙にからんだ抗議とは思はれない。

これを、この年の十一月十九日に、米國公使ウオッシュユブルヌが調停したのである。こゝにおいてビスマルクは、ウ公使の調停にもとづき、航空を行ふ者を密偵とみなすむねをフランス政府に對して通告したのである。したがつて、氣球搭乗員は公に射撃の對象となり、墜落して捕へられた場合は、戦争による捕虜として取扱はるべき慣習を生じた。爾後、氣球に對する射撃、或は、氣球射撃用として特殊火砲の製作が最上の防禦手段として容認せられるにいたつたのは自然であらう。

一八七四年、ロシアは一八六八年における會議の不備を補ふ目的をもつて、ブリュッセル會議を招集した。その席上で各委員達は、既に採用されてゐる戰爭の諸慣例や諸法律を條文化すべきむねの希望を行ひ、航空に従事する者が墜落した場合は戰爭による捕虜として取扱はるべきことを條約文の第二條と第三條とに取極めたのである。しかも、このとき更めて空中爆撃に對する禁止條項をも考慮されたのであるが、兩方共にイギリスの抗議に遭つた結果、辛じて國際的宣言を決議したのみであつた。

興味ふかいは、この會議の席上で、軍用氣球の搭乗者を密偵とみなすべしとなす主張者の一人であつたブルムリー委員が、「千米又は千百米までの空間は占領軍の行動に委せられる」と大眞面目で論じてゐることである。なぜ千米とか千百米と空間の自由を限定したものか、その論據として擧げられた資料がないのでわからないが、ともかく當時の空中に對する關心の程度を窺ふに足るエピソード

はあらう。また、ツルーズ法科大學のボンファイル教授は、敵の戰線を偽裝しないで公然と通過する傳令者である航空者に對し、敵陣地を偵察する目的で山の頂に上り且つこれを越える人間に比較してゐることも興味がある。

それはともかく、一八七四年の決議は、一應イギリスの反對に遭つたけれども、國際公法學界は、戰時國際法概論の中に簡潔に述べてある國際法の諸原則を宣言中に引用して、首尾よくイギリスの異議を撃退したが、この戰時國際法概論は、一八八〇年ロオックスフォードにおける會議に際し、その當局から支持されたものであつた。

異議の撃退の結果、一八七四年の草案は、つひに一八九九年七月二十九日における海牙の平和會議において修正の後採用され、この會議と修正は一九〇九年の平和會議において再び修正された。この案の根源となる原則をつくつたのは、ロシアのエフヅマルテンであつた。

さて一八九九年の海牙における平和會議では空中爆撃に對しいかなる論議と取極めを行つたかといふと、條約の第六十二條で、「爆撃は極端に猛烈なもので、絶對に必要な場合のみ其使用は正當と認められる」と空中爆撃の合法性をみとめ、これと同時に、窒息性、毒性又は麻醉性ガスの投下ならびに彈丸の使用を禁止したのである。

そして、その規定の第五十九條において、「飛行機及び飛行船から爆彈を投下することを許可するが、第五十七條第一、第二、第八及び第六十三條に示す義務を遵守すべきものである」としてゐる。

第一回海牙條約の修正された點は、その第二十三條において、「必要以上ニ損害ヲ及ボス彈丸、或ハ、物質ヲ空中ヨリ投下スルコトヲ禁ズ」といふ一項が條約第五十七條の第二項として挿入され、一九〇七年十月十八日における第二回海牙條約では、毒ガスの禁止條項を更に廣汎に規定し、その第二十三條において、第五

十七條の第八項に、「前記事項ノ外諸兵器ノ使用ヲ禁ズ」と挿入され、その第六十三條は、

如何ナル方法ヲ用ヒテモ防備ナキ都邑、人民ニ對シ空中攻撃及爆撃ヲ禁ズ。

敵軍ノタメ直接利益ヲ與ヘル不動産ニ非ザル限り、防備ナキ住宅、住民地、

村落、都市ニ對シテ飛行機又ハ飛行船ヨリ彈丸ヲ投下スルコトヲ禁ズ。

右ノ關係ニツキテハ要塞ナキ都市タルト要塞ヲ有スル都市タルトヲ問ハズ、

要塞其門戸ヲ開放セル時ハ此要塞ニ對シテハ報復手段トシテサヘモ猛烈ナル慘

虐ヲ蒙ラスガ如キ手段ヲ使用スルヲ禁ズ。

といふのが以上の全文で、無防備都市の爆撃云々と稱されて論議されるところのものは、實に、この第六十三條の規定である。なほこの會議の席上において、國際公法學者として知られたメリニヤツク委員が、空戦法規の必要なしと提唱し

たのは注目される。その論據は、海陸戰の延長と看做し得るからだといふにあつた。

當時、航空機の進歩は、飛行機そのものよりは、むしろ飛行船の方が一步を進めてゐた。したがつて、空爆の禁止條項に對する決定にいたる中心思想は、飛行船自體の進歩と、その將來に對する見通しの方に主きが置かれたものであらうと首肯されるのである。といふのは、一九一一年、マドリッドで開催された爆撃資材の使用に關する國際公法學會では、航空機、特に、氣球はその内部に兵器器材及び人員を搭乗せしめるやうに製作法が進歩した曉には、非常に重大な兵器となるであらうといふ認定を行つてゐることをみてもわかるのである。

事實、一八八三年、フランスのアルペール・テイサンディエと弟のガストンのつくつた電氣モーターによつて運轉せられる小型飛行船の出現以來、數多の飛行船研究家の努力が實を結んで、特に、ツェツペリン伯の第三號飛行船は、一九〇

七年にはやくも二十一時間の長飛行に成功をおさめ、翌年には三十七時間の記録を樹立したのであつた。そして、その翌一九一〇年には、飛行船による世界最初の航空輸送を開始し、爾後の三年間に、三萬二千二十八人の旅客を輸送し、その飛行總距離は十七萬二千五百三十五軒に達してゐたのである。これ等の實際は、當然、軍事研究家の好題目となり、國際法學者の研究對象となつたわけである。

また、この集會では、公法學者が空中戰の禁止を叫んだことも注目される。その論據は「空中戰は、他の戰爭に比し、その慘害が甚大で、海陸共に一般の安全を危機に陥らしめるものである」といふものであつた。しかし、一方には、航空機の存續を可なりと主張する者もあつた。その理由は、空中戰の兵器は、結局、潜水艇や地雷にくらべて、その害がはなはだしくないからといふのである。

ともかく、かういふやうな各種の見解の結論として、「垂直に投下する爆弾は容認するが、水平方向の空中戰、いひかへれば、飛行機相互の戰鬪を禁止する」と

いふ提議が行はれた。この理由は、飛行機相互の戦闘においての射撃戦は、必然的にその方向を知ることができないから、飛行機から射ち出した射弾がどこに落下するか豫知することができないからだといふにあつた。

こゝにおいて、この會議の結果、國際公法學會が提出した空中戦の原則が、次のやうに決定された。「空中戦はみとめるが、次の條件は遵守せねばならない。即ち非戦闘員たる國民の所有物、あるひは人員にむかひ、海戦または地上戦に比しそれ以上の大なる危険を與へないこと」といふのであるか、ともかく學者達は、その良心にしたがつて、その行動に制限を附して空中戦をみとめたわけであるが、空中戦實施の諸條件に關しては言及されなかつた。

一九一四年に勃發した世界大戰は、航空機の軍用化と共に、空中を立體の決戦場たらしめた結果、その四ヶ年にわたる空中爆撃あるひは空中戦の經驗にしたがつて、新たな戦争手段の採用、又は發達によつて生じた攻撃、或は、防禦の新方法

に適用せらるべき諸問題を討議する必要を生じたのである。

この結果、一九二二年二月四日、ワシントン會議の決議にもとづいて、同年十二月、空戦法規に關する會議が海牙において開催されたのであるが、この會議には、日英米佛伊蘭の六ヶ國が參加した。しかし、この會議は大戦前の條約を變更し、或は、新たな適用範圍の制定といふやうな收穫もなく終つたのであつた。したがつて、今日にいたるまで、空戦に關する國際法規は、第一回及び第二回海牙條約によつて定められた諸條件以外何等の制限もないのである。

よしんば假りに嚴重な國際間の取極めがあつたにしても、平時において設定し得る一切の國際的制限とか國際的協約といったやうなものは、戦争の風に遭つては枯葉の風をまくに等しいから、空想を實行せよといふことは兒戲に等しいものだ、ドゥーエ將軍は喝破してゐる。今日の世界的現状にかんがみて、この將軍の喝破は、正に至言であつた。

今日、行ふに難くない凡ゆる空中爆撃が、一片の回顧的存在價値に墮した國際條約の範圍の線に沿ふて進められてゐるのは、戦ふ者の良心における道德的現象に過ぎないことは明白である。特に、わが皇空軍の實際は、これをもつともよく雄辯に物語るところであらう。

飛行機による爆撃の濫觴

空中爆撃の淵源が飛行機ではなくて、實に氣球によるものであつたとおなじやうに、飛行機による空中爆撃も亦けつして前世界大戰のことではなかつた。

イタリアは、飛行機を戦争に利用した世界最初の國であつた。一九一一年、イタリアはトルコに對して宣戰の布告を行ひ、その軍隊はリビヤに上陸した。そして、はじめて戦場で飛行機を組立て、その利用を試みたのである。その結果、敵戦線の搜索とか砲兵の射弾觀測に非常に有效であることが立證されるにいたつた。

しかも、寫眞機を携行して敵の上空を飛行するといふ新し かんがへの實行が、直に敵の頭上に爆弾を投下するといふかんがへに結びつけられたのである。しかし、それは單なる思ひつきであつて、臨機の手段の域を超えるほどのものではなかつた。

といふのは、空中から投下する爆弾の豫想はあつても、まだその出現はみられなかつたからである。また當時の飛行機は、飛行するといふことだけが精一杯で、操縦者と燃料のほか搭載力が殆どなかつたに等しかつた。しかし、このとき、世界最初の爆弾投下が行はれたのである。それは、一甍の爆弾を上着のポケットに入れた操縦者が、齒で導火を咬へて點火の後投下したと記録されてゐる。即ち、手榴弾の投下で、爆弾投下とか爆撃といふ文字の概念にはるか縁遠いものであつた。

また、一九一二年のバルカン戦争においても、飛行機と氣球とは爆弾投

下の役目を受持つたのである。しかし、當時にあつては、なほ一種の試験的、ろみであつて、空中爆撃の積極的役割を帯びるにいたつたのは、前大戦におけるドイツの英本土空襲以來のことであつた。

當時、飛行機よりは、飛行船の方が進歩の程度がたかく、ドイツにおいて、一九〇〇年以來一九一三年までに製作されたツェッペリン飛行船の合計は二十六隻に達し、一九一三年四月に製作されたものは、有効積載量が八千瓩の多量に上り、發動機の總馬力が五百四十馬力、速力は七十浬時となつた。イギリスでも、ツェッペリンの成功に對抗する意味で軟式飛行船の製作に着手し、一九一一年には「五月の蠅」號といふ飛行船を完成した。これは當時もつとも大きなものであつたが、飛行開始前に突雨に遭つて破壊されてしまつた。

一方、ツェッペリンは、研究を重ね世界大戦直前には、二十人の乗員、速射砲、機關銃、無線電信及び爆弾ならびに砲彈を搭載し、時速百二十浬で三十時間の航

續時間に耐へる十數隻の飛行船を備へるにいたつたのである。

飛行機は、一九〇六年十一月十二日附で世界最初のF・A・I公認記録となつたブラジル人サント・デモシンの、距離二百二十米、速度四十一浬三、時間二十一秒二であつたが、大戦直前に發表された一九一四年度記録では、高度六千二百二十米、速度二百三浬八五、周圍距離一千二十一浬、時間二十一時八分四十五秒に達した。しかし、この記録飛行は、あくまでも記録であつて、飛行機の實用化問題についての参考とはならないのである。

前大戦と都市空襲

大戦直前の軍事航空

飛行機の出現する以前から各國は軍用氣球の研究と利用とに關心をむけ、大なり小なり航空部隊の先驅となる氣球隊の組織を持つてゐた。これはわが國でも航空部隊の前身が臨時軍用氣球研究會であつたことに軌を一にするものである。

しかし、氣球それ自體の空中行動は、繫留氣球による敵狀の偵察や射彈觀測、或は、自由氣球によつて偵察又は連絡に任ずるくらゐのことが關の山であつた。しかも後者の軍事行動は、火器の發達にしたがつて、その冒險的な飛行さへ全く封ぜられてしまつた。したがつて、その價値は砲兵や騎兵の補助機關程度の域を

超えるものではなく、戦局の全般に重大な變化をもたらし得るなものでもなかつたわけである。

けれども飛行機と飛行船の軍用化は、新たな空中作戦の發生となつて、戦争形態の概念を根本から變更してしまつたのである。かうした空中兵器が出現しなかつた以前における戦争は、單に限られた地球表面の上に發展するほかはなかつた。そして、その性質は、一方が一地方の占領をのぞみ、他の一方は敵の領有を阻止しようとするものであつた。したがつて、平面戦争の性格は、正面の敵武力に對し後方に有するものを保護し、敵武力の後方に所在するものに到達せんとする目的をもつて、正面の敵武力を撃破することであつた。

が、しかし、人類は航空機の發明による立體領域の開拓にしたがつて、有史以來の戦争の性質を全く破壊してしまつたのである。即ち、極端にいへば、後方に所在するものへの到達のためには、最早、敵武力線を破碎する必要がなくなつた

わけである。わが皇空軍による重慶その他支那奥地への攻撃が、そのもつともよき説明材料であらう。

いづれにしても、航空機の發達は前大戰の勃發を楔機に、戦争手段の性格を一變して、交戦國家相互の全領土ならびに全海上に擴大したほか、これにともなつて、戦闘員、非戦闘員の區別を撤廢せしめるにいたつたわけである。大戰の進行にともなつて、空中は確實な決戰的役割を持つた新戰場となり、陸に戦車、海に潜水艦といふやうな新兵器と共に凄絶そのものゝ文字通り十字砲火が描かれたのである。

しかし、開戦當初の飛行機に對する期待は、決して大なるものではなかつた。その證據には、軍航空の編成がいづれも偵察の域を一步も超えなかつたことや規模の小さかつたことをもつてもわかるのである。が、その理由としては、飛行機が未だ冒険時代であつて、眞に實用化され得る能力を十分に備へてゐなかつたこ

とにも大きな理由を求めなければならない。むしろかへつてドイツにおけるツェッペリン飛行船が發揮し得る行動能力の方が、はるかに大きな期待を求めることができたのである。

けれども飛行機をもつて、爆彈投下を行ふといふ思想が決して捨てられてゐたわけではなかつた。一九一二年八月、フランスの航空隊は、中徑十米の圓の中に一回の飛行によつて最も多くの爆彈を命中させたものに、ミシユランの提供した空中射撃賞金を與へる競技を催してゐる。この競技は航空機を利用する各種の創意を奨勵せんとする目的のもので、競技者は、七匁の小型爆彈五個を携行して、目標上空二百米以上の高度をもつて飛行する定めであつた。また他の試験は、飛行船の格納庫を想定した百二十米に四十米の長方形の目標 對し、最少限一千米の高度からの爆彈投下であつた。

この競技に對しては、それ／＼腕に覚えのある各國鳥人が參加したが、最初の

賞金は、アメリカのスコット中尉が獲得することになった。

彼は、十五個のうち、十二個を命中させ、次等者は、六個乃至十個を命中させたワーチン・メルフェー、ブスケ・バチの両中尉であつた。と記録されてゐる。

また、フランス航空隊では、大戦勃發直前、マイ地方に行はれた演習と連絡し、砲兵の射弾観測ならびに爆弾投下の實驗を行つた。一九一三年には、イギリスの海軍飛行隊は、ソツピイス水上飛行機で十四吋水雷を搭載して飛行を行ひ、コールショットにおいて良好な實驗成績を收め、今日における雷撃機の濫觴をなした。

第一次大戦の勃發した直前における各國航空隊の所有した飛行機は、いづれも一般の民間機に變るところがなかつた。そして、その目的も偵察や射弾観測が主なものであつて、積極的に爆弾効果を狙ふといふものではなかつた。いひかへれば、効果の大なる爆弾を搭載することが不可能であつたからである。

當時、空中投下用として研究されてゐた爆弾は、極めて小型で威力が不十分で

あつたばかりではなく、照準器を使用するといふ方法も發見されてゐなかつた。したがつて、手をもつて投下するわけであつたから、命中する方がむしろ不思議だといはれたくらゐのものであつた。また、その尖端の形狀が適當でなかつたから、地上著發の威力が微弱で不發に終る數も多く、風のために目的物から偏避させられる缺點があつた。そのほか空中で敵機と渡合ふといふやうなこともかんがへられてゐなかつたから、飛行機には、攻撃裝備も防禦裝備も行はれてゐなかつた。

空中爆撃戦の開始

一九一四年六月二十八日、突如、ボスニヤの首都セラエヴオの街頭に起つた一發の銃聲が、第一次世界大戦を告げる號砲であつたとは誰も夢想しなかつた。しかし、事態は風を起し雲を捲いて、たちまち歐洲の天地が古今未曾有の修羅場と

化した。しかも戦場は新に空中といふ舞臺を加へて、正面の敵とのみ雌雄を決するといふ従來の常識をくつがへして戦争遂行の根元を衝き、これを混亂にみちびいて敵を己の意思に屈服せしめるといふ新手段の採用が本格的に行はれた。そして、大戦四ヶ年の經驗は、漸次、空軍編成の主體を爆撃に置くといふ決定的な基礎を、がっちり植ゑ固めたのである。

開戦當時の飛行機は、その航續力が僅かであつたから、遠距離に亘る戰略的搜索とか戦線後方に所在する軍事目標に對する爆撃企圖は、ツェツペリン飛行船を有するドイツ側においてのみ可能であつた。そして、その飛行船による世界最初の爆撃は、八月五日におけるZ第六號のリュツチツヒ要塞をもつて嚆矢とするものである。

歴史的な都市空襲の最初は、フランス機による八月二十三日のライン河畔ミュンハイム市に行はれたものである。同市は、鐵道の分岐點で、軍事的に重要な

據點の一つであつた。この日は密雲の低く垂れた決して良好な飛行日和ではなかつたが、突如、一機の佛軍モリス・ファルマン複葉が飛んで來た。そして、その飛行振りは屋根をかすめるやうな大膽さであつた。しかも、市街の上空を十分間に亘つて飛翔し、前線に運ばれて行くドイツ將兵の輸送列車、或は、停車中の列車群に對して、三個の爆弾を投下した。

しかし、その目標にはいづれも命中せず、市街の中に落ちて炸裂したのであるが、損害は輕微であつた。けれども空襲の豫想に對する認識の不足だつた市民の騒ぎの方が、はるかにひどいものであつたと傳へられてゐる。かうして味方の戦線が敵によつて撃破されないかぎり安全なりと思惟されてゐた銃後も亦戦線とおなじやうに、戦ひの渦中に捲き込まれる近代戦の特徴ある序幕は切つて落されたのである。即ち、こゝに有史以來の夢が破られて、都市空襲は、この日よりはじまつたのである。

パリイに加へられた空襲

第二次世界大戦におけるドイツの電撃戦は、真に文字通り世界を驚倒せしめるものであるが、第一次大戦に際しても亦おどろくべきものであつた。開戦後一ヶ月足らずでパリイは百軒の正面にドイツ軍を邀へる有様であつた。そして、決死の英佛聯合軍がマルヌ大會戦の結果、この進撃を阻止しなければ、パリイは風前の灯であつた。

これに前後して、八月三十日の日曜日、パリイは、ドイツ軍のルンブラー・タウベ型単葉機一機の侵入を受けたのである。そのパリイの受けた最初の空襲は、午後零時四十分頃のことと、東停車場にあつて爆音が連続的に聞え間もなく空襲警報が全市に傳へられた。しかし、當時のパリイ市民は、ほとんどこれを玩具であるかの如く迎へたことは、當時の記録が記してゐるところである。

このパリイに對する最初の空襲では、五個の砲彈改造のものと、三挺の茄子型爆彈數個とが投ぜられた。そして、男子二名、女子一名が死亡し、女子三名が負傷した。どこの國でも野次馬といふものがあるとみえて、物好きな市民の群が爆發のあつた場所へ押しかけたと傳へられてゐる。

爆彈は、ヱイネグリエ街に落ちたものが、ガスの爆發を起し、アルヴイ街とヱイネグリエ街の角にあたるパン屋が爆彈の破裂によつて店頭を破壊したのである。そして、この隣町に長さ二米餘の小旗が落下し、それに砂を入れたゴムの小さな袋が縫ひつけられてあつた。旗には「獨軍ハ、「パリイ」ノ入口ニ在リ。諸君ハ降伏アルノミ。陸軍中尉、ヱイ」と記してあつた。

この最初の空襲の被害は僅少で、樂天的なパリイ市民に大した動搖を與へなかつた。しかし、フランス軍が全般的に苦戦を續け、當時、ギイズの戦線では退却が行はれつゝある最中であつたから、爆彈よりも小旗に記された勸告文の方が市

民に非常な不安を與へたことは事實であつた。

飛行機が都市空襲の結果、地上射撃によつて撃墜せられた最初は、九月八日のドイツ飛行機による第五回目のパリイ空襲であつた。この日の午後五時ちよつと過ぎ、多数のドイツ飛行機がパリイの上空を悠々と飛翔したが、單なる偵察であつたものか爆弾は投下しなかつた。

この中の一機はパリイから二百米以下の高度でランシイをかすめ、機首をシエルの要塞にとつて約二軒ほど進行したとき、地上の歩兵から一齊射撃を受けた。この結果、燃料タンクに命中したため飛行の續行が不可能となつて、要塞と一部落の間に不時着陸を行つたのである。そこには土工達が作業中で、獨機は、その仕事場を破壊した。

顛覆した飛行機から這ひだしたドイツの操縦者は別に逃げようともせず、かへつて土工達をモーゼル拳銃で射撃し、まだ仰天してゐる土工の數名に負傷を加へ

たが、激昂した労働者は、鋤や鍬で立ちむかひ、その同僚の仇をとつた。

パリイは、前大戦間、飛行機によつて四十四回、飛行船によつて二回の攻撃を受けてゐるが、飛行船による最初の空襲を受けたのは、一九一五年三月二十日の夜半から二十一日にかけてであつた。當時、ツエツペリンは、フランデルに或はナンシイにまた英佛の諸港灣に攻撃を行つて大なる戦果をおさめてゐた。しかし、英佛側の爆撃機によつて、戦線後方の無防禦都市がしばしば攻撃を受けた結果、その報復手段として、飛行船による英佛首都の攻撃を決するにいたつたと述べてゐる。

ドイツは西部戦線に所在せしめた三隻の飛行船をもつて、二十日夜半パリイ攻撃に向はしめたのであつた。そして、その一隻は戦線の通過に際し、地上砲火によつて多大の損害を蒙つた爲め、コンピエーヌの敵軍司令部の攻撃に止め、爾餘の二隻は、つひにパリイ上空に達し、飛行船による敵首都空襲の先驅となつた。

その夜のパリイは、統一的に消燈せられなかつたから、約二千五百米の高度で電車の往來するのをみとめることができた。

空襲と知つた照空燈が忽ち天空に交錯してツエツペリンを求め、猛烈な砲火がこれを追つたけれども、一時間三十分に亘つて爆撃を敢行した後、ドイツ飛行船はフランス自動車砲の追躡を受けながら戦線に復歸し、更に激烈な射撃を受けつゝ基地に歸還することができた。しかし、Z第十號は大損害を受けてサン・クワントン附近に墜落し、LZ第三十五號だけが十一時間に亘る飛行を行つて無事に歸還することができた。そして、この空襲は、パリイが夜間攻撃を受けた最初の記録であると共に、都市へ襲撃し來つた飛行船が最初に撃墜された記録である。

また飛行機による最初の夜間都市空襲は、一九一八年一月二十五日のことで、しかも三十機を越えるドイツ爆撃機の大編隊群が大舉して空襲を敢行したのである。攻撃は、午後十一時三十分頃にはじまり、十二時に頂點に達し、一時十分に

警報が解かれた。

フランスの防禦飛行機が夜間の制空中であつたのと防空砲火のためパリイ上空に達することのできたのは十一機であつた。そして、投下された爆弾は、三百匁以下五匁のもの九十三個がパリイ市内、近郊百六十七個、大郊外十三個に達し、死者七十七名、負傷者三百五十名に達する大なる損害を與へ、三百匁爆弾の命中した石造家屋は、その四、五階まで完全に貫通破砕された。

この夜間空襲は、パリイに行はれた最も大きなものであつたが、この空襲に際して、ドイツ軍最高指揮官の與へた命令は、次のやうな全く軍事施設にのみ指示したもので、英佛の無制限爆撃に比し甚だ騎士的なものであつたことがわかる。即ち「再三抗議ヲ行ヒ、又報復ヲ行フトノ警告ヲ與ヘタルニ拘ハラズ、敵ノ砲撃ハ獨逸ノ無防備都(マインハイム、ライル、フリブルグ)ニ行ハレタルガ故ニ、飛行大隊ハ巴里要塞ヲ攻撃スルモノデアル。目標トシテ、停車場、並ニ、軍用ニ

英本土及びロンドンの空襲

イギリスは、海上覇権の掌握によつて三百年に亘る繁榮と名譽とを確保し、その政策も大陸における軍事上第二位の強國とむすんで常に第一位の強國に對抗し、しかも有利な自己の位置を擴大するにあつた。

しかし、航空機の出現とその軍用化は、その傳統を一片の夢たらしめることに終らしめたのである。前大戰の勃發によつて、空間の戰場舞臺化が、最早、イギリスは國全體を要塞なりとする自認を捨てなければならぬ運命となつた。一九一四年から一八年に亘つて、英本土ならびにロンドン上空に邀へたドイツの飛行船と飛行機の襲來回数は百二十二回の多きに達し、ロンドンへは、飛行船によつて十一回延六十三隻、飛行機によつて十九回延二百七十九機であつた。

英本土に對する最初の空襲、即ち渡洋空襲の元祖といふべきものは、大戰勃發

の年の一九一四年十二月二十一日のことであつた。ドイツ軍の勇敢なタウベ一機は、折柄の荒天を衝いて悲壯にもトローバーを横斷して英本土に達し、五個の爆彈を投下し去つたのである。

この日まで海上勢力の絶對優位に依存してきたイギリス國民も、はじめて空中攻撃に對する新しい認識と脅威とを抱かないわけにはいかなかつた。つひにイギリスは傳統のほこりを捨て、空中防備に對する最大の關心と嚴重な警戒を寸時も怠ることができなくなつた。次で、ツエツペリンも英本土に襲來した。一九一五年一月十九日の眞夜中のことである。二隻のL・Z三號と四號とがノーフォルクに侵入したのであるが、地上の防空砲火の活躍によつてロンドン潜入を阻止することができたけれども、爆撃のため死者四名負傷者十七名を出すといふ大損害を與へられたのである。

これよりロンドンを窺ふ飛行機と飛行船の襲來がはげしくなつていつたが、い

づれも海岸附近の上空で地上砲火のためにひなし 引返すほかはなかつた。しかし、當時のイギリスは、なほ防空防禦施設が不完全であつたのと、多くの市民を殺傷するほかロンドンその他の重要都市に大損害を與へるであらうといふ危惧の念を抱かしめ、イギリス國民は次第に空中攻撃に對する脅威を感ずるにいたつた。

飛行船の活用は、ドイツの獨壇場であつた。しかし、聯合國軍側の防空火器、或は、飛行船にとつて最も危険とする飛行機の發達にもなつて、飛行船の性能のうちでも、殊に速力と上昇限度との向上が必須であつた。この要求に基いて、ドイツは、この年の四月あらたに三萬二千立方型L・Z第三十八號を完成した。この飛行船は特に優秀で、マイバツハ二百四十馬力發動機四基、速力毎秒二十六米、上昇限度三千米、その搭載量は一萬五千瓩に上るものであつた。

これによつて、ドイツはロンドン空襲を企圖し、一九一五年五月三十一日の夜半、リナルツ大尉の指揮の下に、歴史的な一大爆撃を敢行した。この夜、L・Z

第三十八號は、悠々と海岸線から侵入してイブスウイツチ上空に達し、このときはるかにロンドンの微光をみとめながら突き進み、エセツクスを過ぎてロンドンの上空に巨姿を現はしたのである。

これより各所に爆弾を投じ、火災と多大の損害とを與へ、七名の死者と三十五名の負傷者を出さしめた。特に、テム河の諸造船所は、その最も大きな被害を蒙つた。これに對して、イギリス側の防空戦闘機は七ヶ所の飛行場より遡撃のため、舞上つて追撃したが、當時のロンドンにも對空火砲の準備がなく、地方軍の三陣地から若干のマキシム砲を使用したに過ぎなかつたと、イギリスのアッシュモア將軍によつて著述された「空中防禦」に記されてゐる。かくて、L・Z第三十八號は、無事、ウールウキツチを経て北海に退飛し、歴史的凱歌を奏したのであるが、これ以來ドイツのツエツペリン飛行船群は、大戦の終了するにいたるまで十一回に亘つてロンドン攻撃を実施したのである。

しかし、數次の飛行船襲撃は、イギリス必死の邀撃戦によつて、L・Z第十二號と、L・Z第十五號の二隻は、高射砲で射られドーバー海峡に不時着水の已むなきにいたり、その間に一隻はワンフォード少尉の操縦するソツピース戦闘機に射墜され、同年九月には、L・Z第三十號が高射砲によつて運航不能となつたとき、ブランドレ中尉の手で最後の止めを刺されたといふやうな壯絶極りない空中戦火も織り混ぜられてゐるのである。

一方、飛行機によるロンドン最初の空襲は、一九一六年十一月二十八日のことで、しかも堂々たる白晝の空襲であつた。このドイツ空軍の勇士は、パウル・プランツ軍曹、ワルザ・イルゲス中尉の兩人であつて、ベンツ六十馬力發動機の裝備されたエルファゲー式複葉機による強行であつた。彼等は、大膽にもヴィクトリア・ステーション目掛けて搭載の爆弾三個を投じ、たちまち急上昇して彼方の空へ姿を没し去つてしまつたが、まさに神出鬼没の水極立つた空襲であつた。こ

のときロンドンの防空戦闘機十二機は直に追躡したけれども、つひにその姿を捉へることはできなかつた。

一九一七年に入つてはその當初から彼我兩軍の飛行機共に夜間飛行の實施をみるようになった。これにともなつて夜間空中戦ならびに爆撃の實施が普通となつた。またこの間には用途に應じた専門の機種を生むようになり、大型爆撃機の出現をみるにいたつた。獨のゴータ、英のハンドレイベーチ、佛のファルマン・ゴリヤット等が、それ／＼戦場の空に活躍を開始したのである。これ等の爆撃機は、搭載量が大なるため空中機動が鈍重で、到底、驅逐機や次第に射程と命中率を増してきた高射砲射撃の敵ではなかつた。したがつて、その爆撃を夜暗の空に行ふようになったのは自然の趨勢であつた。

しかし、かういふ推移をたどつてゐた折柄、一九一七年六月三十日正午、白晝堂々たるドイツ軍ゴータ爆撃機十八機からなる大編隊がロンドン上空に姿を現は

して、港湾施設、造船所、その他主要構築物等に對して大爆撃を加へたことは、意表外の空襲であつただけに世人を瞠目せしむるものであつた。この空襲は、ロンドン攻撃において最も大きな損害を與へたもので、死者百六十二名、負傷者四百三十二名に上つた。この飛行隊は、爆撃飛行第三大隊で、その指揮者はブランデンブルグ大尉であつた。

一方、ドイツの飛行船攻撃は、防空施設の整はない初期にこそ、まったく獨壇場的な威力を發揮してゐたが、驅逐機の進歩と地上防空機關の發達にともなつて敵線上空の活躍が阻まれるようになった。そして、前線に近く設けられた根據地は、しばしば報復的攻撃の的になつたので、國內ふかく基地を轉ずるの已むなきにいたつた。と共に、武装の強化や搭載量の増大、或は、上昇限度を加へんがため五萬五千立方型といふやうな大飛行船の建造に着手したが、これはドイツの誤算であつた。やがて飛行船の活躍は、まったく封ぜられたと同様で、その敵地上

空の飛行は冒險のほか何ものでもなかつた。

また、その船體があまりに老成で、空中に姿を秘匿することが困難であつた。そして、その速力は船體に比例して、はなはだ遲きに失したのである。したがつて、照空燈は容易にこれを發見し、その追照も亦困難ではなかつた。かくてツェツペリンが、若し敵線上空を飛行しようとするためには、餘儀なく悪天候を冒し大高度をえらぶほかはなかつた。

かういふ方針の結果、ツェツペリンによる一九一七年十月十九日の「無音の空襲」が行はれたのである。しかも、この空襲は十一隻のツェツペリンからなる空前絶後のものであつた。そして、この一大壯舉は飛行船爆撃史上もつとも大規模なものであつたが、その結末は大きな悲劇であり一篇の哀詩であつた。

北海の暗空には、次第に北風が強まりつゝあつた。しかし、決死の飛行船隊はロンドンの空に勇躍して渡洋を企てたのである。彼等の爆撃目標は、ミッドラン

ドの工業中心地帯にあつた。荒天の暗空は位置の測定を困難とし大高度の飛行は航路を失はしめ、その中の一隻のみが漸くロンドン上空に達し得ることができた。

ツエツペリンは、大高度を迂り込むやうにしてロンドンに侵入した結果、爆音が北の強風の鳴り渡る音にさへぎられて防空機關の耳に捉へられなかつた。したがつて、防禦軍は照空燈も點することなく高射砲も沈黙を守つたのである。ロンドン侵入のツエツペリンは、たゞ一隻であつたが、悠々と爆撃を加へることができた。他の數隻は、ロンドン郊外近くに達して投彈を試み、その機首を轉じた。この結果、市民を恐怖の底に叩き込み、各所に火災が生じ、構造物の破壊された數も多く、死者三十六名、負傷者五十五名に上つたのである。その出勤數に比較して、イギリス側に與へた損害は決して大きなものではなかつたが、ドイツ飛行船隊員の旺盛な士氣はたしかに絶讃されるものであつた。強い北風は、やがて一

大暴風に變じ、彼等は歸還の途で航路からはるか南方に押し流されていつた。暴風は、先づ五隻を行方不明とし、一隻は祖國の上空に達して墜落、三隻は暴風と闘ひながらフランス戦線に墜落、一隻は燃料が缺乏しフランスに着陸を企てんとして地上に叩きつけられ、搭乗者の若干を乗せたまゝ夜空の闇に吞まれて、その後消息を聞いたものがない。この哀詩を最後に、ツエツペリンはイギリス東部海岸地帯の目標に對して若干の空襲を行つたが、ロンドンそのものに對する攻撃の幕を閉じたのである。

爾後、ロンドンには、飛行機によつて八回の空襲を蒙り、その最後のものは、一九一八年五月十九日の三十機よりなる大戦期間中最大の大編隊群によつてなされ死者四十九名、負傷者百七十七名に上り、これを邀撃したイギリスの防空驅逐機の數は八十四機といふ多數であつた。また、この襲撃に對し、百二十六門の高射砲が火蓋を切り、攻防共にロンドン最後の空襲を飾るに相應しいものであつた。

前大戦間、ロンドンには次表の通り空襲を蒙ったのである。

ドイツの倫敦空襲回数（前大戦中）

年次	飛行機に依る				飛行船に依る			
	回数	襲撃した機數	死	傷	回数	襲撃した船數	死	傷
一九一四年	0	1	1	1	0	1	1	1
一九一五年	0	1	1	1	5	14	132	333
一九一六年	1	1	0	10	5	38	54	184
一九一七年	12	219	330	097	1	11	36	55
一九一八年	6	59	180	433	0	1	1	1
合計	19	279	510	540	11	63	222	572

聯合軍側のドイツ空襲

ドイツは英佛の首都に對して反復的に空襲を敢行したが、聯合軍側の爆撃機は一機もベルリンの空を襲ふことができなかった。前大戦國において、よくベルリンの空に達することのできたのは、一九一七年の秋、フランスの偵察機一機が宣傳ビラを投じ去つたに過ぎなかつたから、嚴密な意味の空襲ではなかつた。一方、ドイツ側の塊都ウインも亦爆撃の洗禮を受けなかつた。そして、ベルリンと同様、憂國詩人ガフリエル・ダヌンチオの率ゐるイタリヤ機によつて宣傳ビラの散華を受けたゞけのことである。

この原因は、聯合國側が絶えずドイツ軍に壓迫されて、飛行根據地をドイツ本土に近く設定することができなかつたことによるのである。即ち、當時の飛行機の持つ攻撃能力が、はなはだ低かつたからのことである。しかし、戦線の背後に近い彼我の重要都市は各々空襲下の戦慄を味はつたわけで、ドイツが前大戦期間中に戦線及び敵國都市に投下した爆弾の總量は、もとより今日の進歩した爆撃戦

に比せば九牛の一毛にも足りないが、その數字は決して少量のものではなかつた。

ドイツの投下せる爆弾總量

種類	投下 數(個)	重 量(吨)
十二吨爆彈	八五五、二八〇	一、〇二六、三五〇
五十吨爆彈	一六七、三二五	八三、六一二
百、吨爆彈	三四、三五六	三、四三五、六〇〇
三百吨爆彈	一五、三八六	四、六一五、八〇〇
一千吨爆彈	七一〇	七一〇、〇〇〇
合 計	一、一〇三、〇五七	一九、一〇八、三六二

また、英佛側もこれに劣らず、イギリス軍が戦線及びドイツ軍の後方都市に投下した爆彈は、六千九百四十二噸で、フランスが大戦間に製造した爆彈の總量は次の通りであつた。

フランスの爆彈製造高

種類	數 量(個)	重 量(吨)
十 吨 爆 彈	三六五、〇〇〇	三、六五〇、〇〇〇
一五五耗加重彈代用	五五、〇〇〇	
一五五耗加重彈代用	六〇、〇〇〇	
一二〇耗威力砲彈代用	六〇、〇〇〇	
五〇耗威力砲彈代用	二一、〇〇〇	
五十 吨 爆 彈	五四、〇〇〇	二、七〇〇、〇〇〇
百 斤 爆 彈	四、〇〇〇	四、〇〇〇、〇〇〇
百四十 吨 爆 彈	一、一〇〇	一五四、〇〇〇
五百 吨 爆 彈	五〇	五〇、〇〇〇
十 吨 燒 夷 彈	五六、〇〇〇	五六〇、〇〇〇
照 明 彈	四四、〇〇〇	
燒 夷 彈 霰 彈	五五、〇〇〇	
照 明 彈 霰 彈	一七、〇〇〇	

かならずしも、この全弾が投下されたものではないが、フランスも亦いかに爆撃に意を注いだかゞわかる。しかし、ドイツに比して英佛側の爆撃は、終始非難されるものであつた。前大戦のドイツ航空司令官たりしホップネル大將は、その著「前歐洲大戦におけるドイツ空軍の活躍」において、ドイツの爆撃實施に對する對度に関し、次のやうに述べてゐる。

「獨軍空中攻撃は、海牙における第二回平和會議の協約に據りしものにして、本會議に於て、航空機よりする爆彈投下の自由を強要せしは、實に佛國代表なり。したがつて開戦當初獨軍はこの協約に據りて國際公法的に認められたる爆撃を、陸戦慣例に倣ひて、たゞ要塞及び狹義の戰場、即ち交戦地區内における軍事上の要點にのみ實施し得るものと見解し、獨軍の爆撃實施を其範圍と制限したり。

しかるに一九一四年秋、英軍はこれを犯してデュツセルドルフの格納庫にありし我ツエツペツン飛行船第二號を破壊し、次でフリードリツヒスハーフェンを攻

撃し、もつて戰場より遠隔したる軍事目標に對しても亦爆撃し得る先例を開けり。しかもなほ當時の英軍は非戦闘員たる一般市民の安靜を保證したりしが、佛軍にいたりては、英軍とその趣を異にし、一九一四年十二月四日、全く無防備なりし戦線を距ること八十軒に所在するブレイメンのフライブルク市を攻撃して、全然戰爭に關係なきこの地方をして、硝煙流血の巷に化し、無辜の人民をして空中戦の慘禍を味はしめたり。これにおいて佛軍に對する應酬やいたらざらんとするも能はず」

以上は、その緒戦から聯合軍側が無防備都市に對し爆撃を加へ國際條約を蹂躪したといふ非難であるが、爾後、前大戦の終末にいたるまで、英佛の飛行機はしばしば非人道爆撃を實施し、今日にいたるまでその記録を明らかにしてゐる。

一九一五年四月、フランスの爆撃機は、まったく無防備地帯として知られたブラツク・フォレストの街に現はれて、恐怖に戦く市民の群に爆彈の雨を降らし、

しかも、その上學校を目掛けて投弾し去つた。次で、その翌々日、佛機は又も非武装地帯のバーデンに飛んで、今度は校庭で遊戯にふける小學生の群を目掛けて爆撃を加へ、多數の可憐な兒童を殺傷したのである。

當時、たかく千メートル以下で飛行する飛行機が、學校か否かを識別し得ない理由はないので、明らかに意識的な悪魔の行爲であつた。これが若しドイツによつてなされたとしたらどんなものであつたらう？ ドイツの第九回目パリ攻撃、即ち、一九一四年十月十一日の空襲は、死者五名、負傷者二十三名を出したのであるが、世に有名なノートルダム附近に落ちた一弾は、寺院の樋に達して屋根から梁に移つた。しかし、火は直に消し止めることのできたものであつたが、これに對し最高諮問院議員のアメクト大司教は、次のやうな抗議書を提出したのである。

「十月十一日、日曜日、午後零時三十分、獨軍飛行機はパリに爆弾二十個を

投じ、爆弾は罪なきもの五名の生命を奪ひ、二十數名を負傷せしめた。このうち三個は明らかなる意思をもつて、ノートルダムの本山に投ぜられ、その一個は非常なる被害を惹起し、大火災を起した。吾人は野蕃にして犯罪的なる此の暴行に對し抗議するの義務を有す。この暴行は軍事的必要であると辯解し能はざるものである。崇高なる寺院に加へられたる攻撃は、吾人が基督教の世界の刑罰に對し告知すべき不敬罪を構成す」

といふのが、その全文である。實際の記録では、小火にいたらざる程度のもので、市民は、その日の集會に何等不自由なく出席することができたと記されてゐる。アメクト僧正の抗議書なるものは、まことに針小棒大、大火災を生じたところから笑止千萬であると共に、彼等の國民性が露骨に示されたものである。これは昭和十二年イギリスのキャンタベリー大僧正が支那空軍の我が病院船その他に對する不法爆撃の非を掩ひ、殊更に我軍の爆撃に對する誣告的抗議の叫びを擧げた

のと類を同じくするものである。

一方、ドイツが英佛の首都に行つた空襲の正當性は、大戦後兩國の軍事専門家によつて、それ／＼立派に肯定されてゐることをもつてもわかるのである。これに對する理由は、空戦法規第六十三條の規定に示された通り、パリ及びロンドンには、軍隊の補給地、戦闘資材の製作地、或は、軍略作戰の中樞地のためであるといひ、これ等の軍事的據點以外の目標に對し爆撃を差控へたのは専ら人道的見地によつたもので、この重要都市を空中から政撃することにより一般市民に害を及ぼすことは明瞭であると述べてゐる。

即ち、ドイツは第二回海牙條約の決定を重んじて、武装都市や直接戰場にある軍事上の目標にばかりを爆撃して、より以上に精神的にも物質的にも大なる價値を持つた後方の重要な目標の爆撃を正義人道の立場から絶対に行はなかつたのである。

これに反し英佛側の爆撃は、まづたく海牙條約の規定を無視して行はれ、前に述べたバーデンの小學兒童爆撃によつてもわかる通り、ドイツの無防備都市、或は、非戦闘員市民の多くが屢々空襲を受けて大なる損害を蒙つた。ドイツはこれに對し英佛側の政撃は、まづたく戦争目的の範圍外に出づることが多かつたと、その非を述べてゐることは、單にホツプネル大將の言のみではない。

この兩國の擧は、空軍を全然政略的目標に使用して、敵國民の精神力と士氣を沮喪させようとしたにあつた。しかし、それは結果において非人道的な條約無視の爆撃にあつたことは無論で、ドイツは遂に一九一七年以來この不自由な規定にしばられることなく、無制限爆撃を敢行するにいたつたのである。

これは英佛空軍の止るところを知らぬドイツの無防備都市空襲に對する復讐によるものであつたが、ドイツはなほ被空襲都市の一般市民に災禍の及ばんことをおそれて、「軍事上重要な價値あるもの」みに對して爆撃するよう慎重に配慮し

た」とバリィ並にロンドン空襲の正当性を發表してゐる。

かうして前大戰末期にいたつては、開放無防禦の都市村落、教會、民家、病院、學校、孤兒院、或は、歴史的記念物等の爆撃と共に、老幼婦女子の死傷が多く、軍事的損害の方が少く、却つて不均衡状態を呈するにいたつたのであるが、條約無視の本家本元は實に英佛兩軍にあつたのである。そして、彼我共に無差別爆撃戰の開始となつたのであるが、ダヌンチオによるイタリア飛行隊の埃都遠征は、埃軍の飛行機がベニスを襲つて、教會その他歴史的記念物を爆撃したことに憤激した結果であつた。

いづれにしても、ドイツは首都ベルリンに對して敵機の跳梁をゆるさなかつたが、その他の國境に接壤する諸都市ならびに戦線の各所において、ドイツが敵線に對して行つたと同様程度の爆撃を蒙つたことは、前に示した英佛兩軍の爆撃投下總量、或はその製造高によつてもわかるるところである。ドイツの發表による聯

合軍のドイツ空襲實施は次の通りである。

英佛聯合軍のドイツ空襲

年 別	回 數 (日 數)	機 數	死 者	傷 者	損 害 (馬 克)	爆 彈 數
一九一四年	(六)	一二	九	二五	七、五〇〇	二九
一九一五年	(三〇)	一〇二	一一一	三二九	七一九、四〇〇	八七九
一九一六年	(三二)	二五〇	一五一	一七九	八八八、二〇〇	九一五
一九一七年	(三七)	一、〇五〇	七七	四一七	六、四七六、八〇〇	四、九〇三
一九一八年	(六四)	二、七七八	三八一	八〇四	一、五三八、〇〇〇	七、三三五
總 計	(一、一五四)	四、一九二	七二九	一、七五四	二三、四七二、〇〇〇	一四、六一

大戰初期における空襲の實況

行動のぶい爆撃機が、白晝戦場の空や敵線ふかく侵入することは冒險であつ

た。それは高射砲の射撃もさることではあるが、敵の駆逐機の餌食となりやすかつた。したがって大戦後半には、爆撃機が行動する際には、味方の戦闘機がこれを掩護するやうになつた。この危険を避けるために、夜空の暗に姿を秘匿して敵線上空に行動する夜間飛行が次第に進歩していった。敵機の眼から都市の存在を確認せしめないための方法が即ち燈火の管制である。しかし、當時の空襲振りや防空が如何に緩慢であつたか、次の手記に當時の實況を知ることにならう。

本手記は、フランス航空隊の至寶といはれたオーベルンドルフ男爵のエキバールジユであつたダンチエー軍曹が、マインハイムの獨飛行船格納庫を攻撃した夜襲の實現である。男爵は、一九一六年十月十三日、マウゼル工場爆撃に加はり、オーベルンドルフで戦死した。

夜は全く閉ざされてゐた。はるか遠くには、瑞西パールの市の燈火が赤く夜空に

反映してゐた。近くにはミュールハウスが見え、ラインの彼方にはフレイブルゲンやブリスガウの燈火が寶石をぶちまけたやうに燦いてゐた。

機の脚下には、コルマルの燈火が輝えてゐたが、爆音を聞きつけたか燈火がだん／＼消えていった。私は操縦席の男爵を振り返つて、

「氣がついたらしいぞ」

と注意を促した。われ／＼が部落や町の上を通過すると、たちまち、パツ！と燈火が消え、プロペラの風で地上の燈火を残らず吹き消してゐるやうな趣きであつた。

われ／＼は、ライン河を目標として進んだ。その流れは夜目にも著しく燦銀色に光つてゐたから、われ／＼の目指す目的地にとつて、絶好のみちしるべであつた。

私は、時々地圖を按じたが、そのとき敵にさとられぬため懐中電燈を手で掩ひ

ながら、小さくなつて用心した。やがて、ストラスブルグの上空に達した。

「見給へ君！ このすばらしい夜景を……」

と男爵は叫んだ。まさに九時十五分であつた。

八百米の高度から眺めると、廣場、道路、ケルの町とストラスブルグをつなぐ橋梁などが手に取るやうに眺められた。市街は、なんとなく活気を呈してゐた。

と、一瞬！ その一區域が暗黒の中に沈んでしまつた。この市街は電燈を使用してゐるのであらう？ だからスイッチ一つで眞暗になつたのだ。空襲警報！ 脚下の狼狽振りが察せられる。一つの區域から次の區域といふやうに見る／＼裡に二區三區と暗黒の帳に包まれていつた。

また郊外の方も暗くなつてはいくが、暗い市街地を包んだ郊外の瓦斯燈がポツリ／＼消えていくのは、實に奇妙なみものであつた。われ／＼の爆音におどろかされたストラスブルグ市は、全く暗黒な湖の底に沈んでしまつた。

われ／＼は、八百米の高度を確實に保つて目的地に突き進んでゐた。遠くには點々と燈火が見えてゐたが、機の接近にしたがつて、たちまち消えていつた。既に、ドイツ側では警報を發して警戒してゐるらしかつた。

ラウドーを左にみて進むと、機首の直前に輝しい市街を發見した。カールスリユーへ市だ。われ／＼は、その上空に進み、そして二回の旋回を行つて敬意を表した。

私は、呑氣に賑かな道路や廣小路を眺めてゐた。夜光時計はかつきり十時であつた。私があか／＼と輝いたブリマー宮殿前の廣場を眺めてゐるときだつた。一瞬の間に、市街の電燈は一つも残らず消えてしまつた。

と思ふよりもはやく、美しい花火のやうに高射砲が機の周圍で炸裂しはじめた。われ／＼には重大な任務が残つてゐる。いたづらに時を過しながら危険に身をさらしてゐる必要はない。男爵は、グイと機をひねつて急旋回の後、機首をライン

河に向けて目的地に進んでいった。

發動機は、八百回轉で依然順調だった。機體は燃料が軽くなつたので具合よく進行した。はるか彼方に天を焦す燈火の見えるのは、たしかに大きな市街にちがひない。「占めた！」あの燈火さへ消えなければ目的地に達することは易々たることだ。私は、その燈火の燦きを凝視し続けた。市街は、次第に接近し、大きくひろがり、つひに眼下に現はれて來た。われ／＼は、千五百米の高度を採つた。男爵は、スイッチを斷つた。敵にさとられないやうに、無音の滑空を続けながら市街の上空に達しようとする手段なのだ。

「もすこし高度を下げてみよう。見つけられたらうるさいが、爆撃には都合がいい。」

男爵は、「よしきた」といった。

かうして靜かに三百米まで降下していった。市民諸君は、屋根の上まで敵機がせまつてゐるようとは唯一人夢にも思つてゐないであらう。

高度がエツフェル塔くらゐなので、舗道を歩く人、或は、車道を横切る人の姿がはつきり見える。廣い通りでは、電車が四つ角で停り、乗客の乗降りがすむと、また走り出していった。電車の中では、さだめし車掌君が切符を持つて、お客の中を揉まれてゐるのだらうと想像されてならなかつた。

男爵は、機首をめぐらした。そして、目標を素早く見出して指示して呉れた。なるほど大きな工場の硝子屋根が電氣に反射して輝えてゐる。この工場は毒瓦斯の製造のために夜業を續けてゐるのであつた。

わが機は、獲物を狙ふときのいつもの姿勢に移つた。急降下である。私は、手袋を脱いで投下器のレバーを握り、照準器に軀をよせかけながら男爵と連絡をとつた。そして、右、左、真直……私は力を罩めて、一氣に三彈を投下し、効果いかにと真下を眺めた。爆弾は、まさしく工場を中心部に命中して、おそろしい爆

發を起し、その爆風による影響は機上でも十分に感じられるものであつた。

やがて真紅の焰が硝子屋根から迸り、工場は確實に破壊されたのである。この爆發と火災とによつて上昇氣流を生じたらしく、機は、一氣に五十米ばかり吹き上げられた。

そこで男爵は直ちにスイッチを入れて、一舉に五百米に上昇し、その高度を保持しながら工場の附近を旋回して、経過を見守つた。そのうちに、其處彼處に狂火のやうな尖光がピカ／＼と閃きだした。何といふ愚かしいことだ。何故、市街の燈火を消さないのであらう。

われ／＼は第一の凱歌を乗せて、ライン河を渡つた。そして、何の苦もなく、目的地のマインハイムに飛行していくことができた。

この市街も亦消燈することを忘れてゐたのだ。われ／＼は容易にツエツペリン格納庫を發見することができた。ふた／＼びスイッチを斷つて、空中滑走に移りな

がら市街に入り込み、第一の格納庫めがけて機首を突込んだ。可憐な空の女王は、その中で私達の贈物を待ち受けてゐることであつたらう。

私は、正確に照準し、最後の三發の爆彈を投下した。爆彈は屋根をつらぬくと同時に爆發して、そのおそるべき爆音は耳朵に響いて物凄かつた。

手記は、なほ續いて霧に包まれ歸還の難航を語り、メツツ戦線上空ではドイツ火砲に取圍れ、空中の寒氣と戦ひながら飛行中、つひに燃料がつきて不時着を行ひ輕傷を負ふにいたつたまでが續られてゐる。

要するに、この手記を讀んで感じられることは、當時における緩慢な燈火管制振りや比較的空中に對する警戒の薄かつた點である。と同時に爆撃それ自體も亦いかにのんびりしたものであつたかを首肯し得られるであらう。

爆弾と防空の過去現在

爆弾と爆撃法の進歩

前大戦の勃發と共に航空機利用の可能性が十分に認められて、日一日と進歩をもたらしつたけれども、飛行術の誕生當時にはかくも發達するものとは豫想されてゐなかつた。と同様に、最初は空中からする爆撃も飛行機においては輕爆弾からはじめられた。この種のもものは一握の大きさで、爆撃に當るものは、この彈を縁の上から投ずることができた。いはゞ空中から手榴彈を投ずるやうなもので、その効果は僅少であつた。

その後、空中投下専門の爆弾が生れ、これによつて有效な爆撃戦の開始をみる

にいたると、これにともなつて投下器の創案がなされた。その最初のもものは、搭乗者の前方に垂直管を設け、この管を投下器とした。しかし、それも飛行機自身の搭載量が少なかつたから、たいてい四個くらゐ装着し、爆弾をその内部に吊下げ、レバー式の鈎を外して投下するものであつた。次で、安全な新しい型式のもものが使用されはじめた。一つは爆弾を水平に重ね、投下手は側面の大きな釦を押して一個を投下すると、次の一個が投下位置にくる式のものであつた。しかし、この投下器は小型用のもので、五十匁から三百匁の爆弾には、運動自在につくられた金輪式が採用された。この種のもものは、爆弾の中央を支へるか、或は、圓錐滑車に連絡した金具によつて支へられ、胴體の下か下翼の下面に装着されるやうになつてゐた。そして、その投下に際しては、機體の内部からポテンソによつて行はれるものであつた。

最初の爆撃法は、機體の速度と爆弾の重量とをあらかじめ計算して置き、目測に

よつて投下したのであるが、風によつて偏流を生じる場合その他の原因によつて正確な投弾は困難であつた。

この不備を補ふ目的で爆撃照準器が考案されるにいたつたのである。これによれば、機の對地速度がわかり風位風速の算出も可能であつたから、比較的正確な爆撃が實施されるやうになつた。しかし、前大戰當時における爆撃は、今日の百分の一にも達しない小規模なもので、破壊殺傷、或は、焼夷にしてが、問題になるものではなかつた。むしろさういつたことよりも、防空施設の整はなかつた當時では、市民を空襲下に戦慄せしめる精神的影響を與へることの方が大きかつた。

當時の投下方法は、凡て水平に行はれるもので、今日のやうな急降下爆撃法といふやうなものは行はれなかつた。今日のやうな急降下爆撃法が採用されたのは猛烈な風壓に堪へる機體の發達によるもので、當時の木製飛行機では、到底、こ

れを行ふことができなかつたのである。

海軍機が魚雷を胴體下面に抱いて、敵艦を襲撃する方法は、既に一九一三年イギリスがこれを實驗し、一九一五年五月、サンビーム・ショート水上機が、ダーネル海峡を航行中の獨船二隻に對し、實際に政撃を行つてゐる。これは今日通商破壊戦や敵艦隊襲撃の常識で、海洋の空中攻撃は正に雷撃機の獨壇上といつても過言ではない。特に、急降下爆撃機の發達は、これを一層容易にしてゐるのである。

これに對して面白いエピソードがある。一九一六年、ジュットランドの海戦に際し、イギリス雷撃水上機を僅か一機しか所有してゐなかつた。ところが、この七ヶ月以前にアドミラル・スユエター中佐が雷撃機二百機つくことを海軍省に建言したが容れられなかつた擧句、なほ再三再四主張したので、彼はアドリアチツクに左遷されてしまつた。空中魚雷は、普通の魚型水雷を低空で投下するだけ

の相違である。

爆弾は、前大戦當時すでに一千匁のものまで製作されたが、その数は多くなかつた。そして、その種類は、破片爆弾、地雷爆弾、破甲爆弾、焼夷弾、發烟彈、照明彈等で、他に若干の特殊爆弾が製作された。即ち、ドイツの毒瓦斯彈、液體空氣爆彈、エレクトロン焼夷彈等であるが、これ等は使用されることなく休戦となつて、その效力の實際は後日に残されたのである。

近代戦に使用される爆弾の目的も亦前者に相違するところはないので、性能の進歩、或は、その目的の上に新しい考案がされてゐるばかりである。曰くソ聯の製作になる「モロトフのパン籠」これは親子式爆弾で接地後に散發し、人馬殺傷効果を大ならしめんがために製作され、ドイツの遲發性爆弾は時限信管を附してある一定の時間後に爆發せしめ、その間附近一帯に大なる不安を與へるアイデアのもの、或は、非常に高音を發して落下する高音響式爆弾といったやうなもの、

出現がみられてゐる。

またイギリスでは今次大戦に際し、焼夷カードを使用したと傳へられてゐるがその效力のほどは大したものではないらしい。いづれにしても、いかなる新奇爆弾であらうと、一度、知つてしまへばそれまでのことである。要は、天から降つてくる量の問題と、これに對處する國民の防空精神にのみ問題が残されてゐるわけである。なほドイツでは一千八百匁爆弾を使用したと傳へられてゐる。

投下爆弾の効力

弾種	侵徴力
一〇〇匁	尋常土 良ベトン 弱ベトン クルツプ鋼
二〇〇匁	七、五三米 〇、四六米 〇、五七米 〇、〇八八米
三〇〇匁	七、五九米 〇、五六米 〇、六七米 〇、一〇七米

(三〇〇匁以上の場合は、數層の鐵筋コンクリート家屋を貫通す)

震盪力

- 一二砲 十米以内の窓硝子を破壊し、木造家屋を損傷して使用不能に陥らしむ。
- 五〇砲 五米以内の堅固な石壁を破壊す。
- 一〇〇砲 十米以内の堅固な石壁を破壊す。
- 三〇〇砲 十五米以内の厚さ五十種の石壁を破壊し、餘力を以て、その後方を著しく破壊す。直撃すれば数階の家屋を粉碎す。
- 五〇〇砲 附に落下したのみを以て、大家屋を粉碎し、直撃すれば集團家屋を倒壊せしめる。
- 一、〇〇〇砲 右に同じ。

空中化學戦の問題

第二回海牙の平和會議では、毒瓦斯の使用を豫想して、これを國際條約で禁止した。しかし、前大戰では、一九一四年四月、ドイツが三回に亘つて窒息性毒瓦斯を戦場に使用し、全世界に一大センセイションを捲き起した。この例からみても、毒瓦斯彈による空中化學戦は必須的なものとみられながら今日にいたつてゐる。

この空中化學戦が戦争の歸趨をもつとも迅速ならしめる手段であることは、萬人の等しく認めるところである。にも拘はらず何故にこの手段が採用せられないのであるかといふ問題は、それが眞に非人道的であるのと、互にその報復を惧れるが故である。しかし、その報復を受けるの暇を與へぬ自信を有するにいたつた場合、この人類殲滅戦は必然的に交戦國いづれかの一方によつて仕掛けられるであらうことは、過去における國際條約の價值によつても首肯し得るのである。

空中化學戦については、はなはだ多くの論戦が行はれた。ドゥーエ將軍との論戦に際し、ボラツチ將軍は、空中化學戦手段は反騎士的精神のもで一切の人道的精神の放棄なりと稱し、アルバネツス博士は、武装せる紛争の發展が正當ならんがために強固な取締によつてこれを規正せよといひ、ブアラー提督は、これを目して賤劣なりといった。これ等に對し、ドゥーエ將軍は、極めて簡單に論駁し空

中化學戰の必須的なものであることを説いた。その二三の要旨を抜萃してみる。

「真面目な爆裂弾の破片によつて寸断せられるか、或は、有棘鐵條網内で悶死するを選ぶか、潜水艦内に埋没して死を選ぶか、それとも有毒瓦斯によつて窒息死を選ぶかの問ひに對しては選擇に苦しむほかはない。どれにしても、この待遇に甲乙はない。戦争は涙を揮ひ心を鬼にして觀察する必要がある。真面目な爆弾で行ふも、或は不誠實な瓦でこれを行つても、結果は同一である。死、破壊、荒廢、苦痛、恐怖、ならびにこれによつて生ずる一切の事柄である」

「戦争は、全國民の運命を賭するものなり。勝利を得るといふことは自己の意志を敵に果するを意味する。これがためには敵の物心兩方面の抵抗力を破碎するを要す。これは敵に對し敵が堪へ得られざる底の損害量を蒙らしむるに非ずんば得て求むべからざるなり」

「一國民の物心兩方面の抵抗力は廣大である。したがつて、勝たんがために敵

に與へる損害量も亦廣大でなければならぬ。これを肯定するとすれば、合法的損害、非合法的損害、或は、人道非人道、文明野蕃と稱しても、これは單なる水掛論に過ぎない」

「戦争に於ては、高尚な武器、卑劣な武器の區別はない。效力に差異ある武器だけが存在する。人類の進歩は、戦争に關する武器の效力を益々有效ならしむるため、科學と工業とをこれに寄與せしむる以外、なにもものをも他に考慮することはない。人類は、この思想に基いて憐人同胞を潰滅するに最も適切な手段を實現せんとして常に努力して來たゞけである。これは頗る醜惡のものであるが、事實は如何ともなすことができない」

「一つの武器について、その效力のみを探求するのは論理的であり又人間的でもある。しかし、戦争に於ては敵を殺すか又自ら死するかである。敵を殺すと共に、自身は安全なるやうに最良の方法を探求するのは論理的で人間的である。一

つの武器にして益々有効であれば、いよく使用されるにいたるであらう」

「宿命的に、この武器は禁止武器とならう。しかし、若し余が不良の徒に攻撃せられ、拳銃を所持せりとすれば、余は武器携帯違反を一笑に附して平然これを使用する。事件が一度終れば余は規則違反であらうが、余は自身の生命を救つたのである」

「戦争に於ては、平時の軌範を採用することを得ない。戦争と平和とは相反する位置にある。不具戴天の敵に對し不意に襲つて背部に一彈を見舞つたとすれば余は捕縛せられ余の自由と私權とを失ふ刑に處せられるであらう。これは平時の状態である。余の軍服と異なる軍服を着用した未知の一人に對し、若し同様の行爲を行つたとすれば、或は、余は大なる賞讃を博するであらう。即ち、これは戦時である」

「諸條約を尊重せざる對敵により吾人が空中化學兵器の使用を強制せらるゝに

いたるべきことあるを想へば、吾人は物心兩方面に於てこれを使用すべく準備せられなければならない」

「以上は、凡ての國家の唱ふる理窟にして、これは次の如き奇妙なる現象を呈する。即ち、凡ての國家は空中化學兵器の準備を行ふ一方に於て、凡ての國家は不合理なりと宣示することである。この奇妙なる現象の起源は、合法的兵器、非合法的兵器の區別に關する非論理的な性質に發するもので、兵器は、これを有効無効に區別するのほかなきを思はぬ結果である」

「したがつて、空中化學戰に關する條約は、何等、實際的には存在せざるものである」

「不幸な空中化學戰は發生すべし。一切の武力が運用せらるゝ戦争において、既に完成し且つ準備しある偉大な一武力が使用せられることなく秘匿せられることは、到底客認し難いのである」

ドゥーエ將軍は、右によつて空中化學戰の正當性を述べ、次に、アルパネズ博士の「國際紛争の解決、及び、戰鬪行爲の正しき發展のために嚴格なる規定の實現を熱望す」といふ所論に對して、凡そ次のやうな言葉をもつて反駁し、空中化學戰の不合理ならぬ所以を強調してゐる。

即ち、戰爭は規正することができない。假令、戰鬪行爲が正しい光景を呈するやうに希望したとしても不可能である。人類の進歩は、戰爭を決定するにいたる諸原因を消滅せしめんがために存在すべきものではあるが、若し、戰爭が勃發すれば、常に戰爭の開始である。いひかへれば、人類と物との破壊によつてのみ解決をみるにいたる現象であるから死活をほかにしては戰ふことはでき得ない。死活を度外して戰ふものに對し、「その手段を使用してはならぬ。何故なれば、それは不正だから」と誰もこれをいひ得いのである。そして、將軍は、更に語を繼いでいふ。空しく死せんよりは、萬事を敢行するにある。死せざらんがために戰ふ

ものに對し、萬事は許容せらるゝなり」と。即ち、西洋流の死中に活を求むる哲學である。

また、將軍は、その結論において、文明的、或は、野蕃的だと區別のできるわけではない。たゞ效力に多少の相違ある兵器が存在してゐるだけである。殺傷、破壊、荒廢を避けようとすることは、あらかじめかんがへられることではあるが、それを遂行する手段に區別があらうとは了解できない。したがつて、人類は須く次の事柄を辨へなければならない。即ち、戰爭の實行を回避するか、或は、戰爭において空中化學兵器が、その全可能性を發揮して、十分に使用せられることを黙つてみてゐるほかはないことである。

以上は、ドゥーエ將軍の空中化學戰に對する必須的見解であるが、既往の歴史に徴して、われ／＼も亦これを首肯しなければならぬ。

世界の文明國家で毒瓦斯研究を行つてゐないといふ國家の存在はない。しかし、

いかなる正體を持つてゐるかについては、各國とも嚴秘に附してゐるから知るよすがもないが、前大戰當時、既に使用された毒瓦斯の種類は數十種といはれ、分析的に研究されたもの、數は約三百種にのぼつてゐることをみても想像に難くない。

前大戰當時、戦争の終了までに、有效だといはれて使用されたものは、「イペリット」「ホスゲン」「ヂホスゲン」「鹽化ピクリン」「ヂフェニール鹽化砒素」「ヂフェニール青化砒素」並に、青酸等であつた。これ等の毒瓦斯を便宜上、生理作用によつて分類してみると、大體、窒息性、糜爛性、催涙性、クシヤミ性、並に、中毒性の數種に分つことができる。

一方、細菌の空中投下も亦豫想せられる空中化學戦の一種であらう。日支事變に際し、卑劣な蔣の軍隊は、地上で細菌戦術に出で、ノモンハンではソ聯機が空中から湖沼に撒布したといふ暴舉が傳へられてゐる。空中細菌戦術は、豫想では

なくして既に開始をみたのである。

なるほどいかなる國際間の取極めも、或は、人道論の見地からみても、その取極めが常に一片の空文に過ぎないものであることを、われ／＼は更めて認識しなければならぬ。そして、常に正義の遵法者は獨りたゞ我が大日本帝國の皇軍を措いて他にこれをみなかつたことを強調し、且つこれを大いに誇り得るであらう。と同時に、そのことあるべき豫想して、萬一の際には敢てこれを惧れず對處するの心構こそ肝要である。毒瓦斯も亦十分にこれを防ぎ得る手段の考究は盡されてゐるのである。

防空の發達

新しい兵器、或は、新しい攻撃方法の發見にともなつて、これに對抗する防禦方法が構ぜられるのは古今東西に亘る不磨の鐵則である。氣球によつて歴史的な

空中爆撃の幕が切つて落され、飛行船による空中飛行の將來性が確認される時代になると、第一回の海牙條約によつて國際的な空中戦法規を取極めたことは既に述べた。と同時に航空機としての氣球や飛行船に對して射撃を目的とする特種火砲の製作を行ふことが、その活躍に對する唯一最上の策であるといふ思想を生んだ。即ち、防空思想の萌芽である。

氣球に對する攻撃について、これをいかにして防禦するかの方法を論じた世界最古の書は、わが林子平先生による「海國兵談」であつたことに注目しなければならぬ。當時、氣球のなるものなるかを辨へたものゝ存在は、全國にも極めて稀としか思はれない時代であつたにも拘はらず、はやくも風船の襲來を想定した林先生の卓見と新知識には、まつたく敬服するほかはないであらう。

その防空論の要旨は、まづ氣球の性質を述べ、氣囊に顛充しあるガスを放出すれば飛行の自由を失ふものであるから、若し氣球が攻め來つても狼狽することな

く、弓箭又は鐵砲をもつて氣囊めがけ射撃せよといふものであつた。

實際問題として、對空射撃用の火器が要求されるようになったのは、前大戰の勃發と共に航空機による本格的な爆撃戦が開始されるようになってからのことである。しかし、最初は彼我共に從來の火砲を改造したものが主で、その數もはなはだすくなかつた。のみならず對空射撃術といふやうな方法も研究されてゐなかつたから、航空機の性能が日一日と加はつていくにしたがつて、高射砲問題は眞剣に考慮せられなければならなくなつた。ドイツが一九一五年の初期に使用しはじめた最も優秀な高射砲は、七・七糧自動車旋回軸砲で、その發射速度は一分間に二十五發、射角七十度であつた。

高射砲の發達にともなつて、その射撃法も次第に向上したが、それは製作そのものよりも敵機の位置を測定する器械の研究に俟つものであつた。この種の測定器械は大戦の勃發と共に創始せられて、この完成への努力は全戦役間を通じて行

はれたのである。一方、對空射撃のために機關銃を使用することは、最初から行はれたけれども、高角度射撃における彈道の研究とか照準方法あるひは教育に缺陷があつて、ほとんど功を奏さなかつた。自然、比較的高空を飛行する敵の飛行機を防禦する目的で、機關銃を使用することは、まったく徒勞に期したといはれてゐる。

前大戰における空中射撃の命中率は、次のドイツの發表によつてもわかる通りその初期後期を比較すれば、雲泥の相違が現はれてゐる。

前大戰間ドイツの射撃機統計

年次	撃墜機數	一機に要せし彈數
一九一四—一五年	五一	一一、五八五
一九一六年	三二二	九、八八九
一九一七年	四六七	七、四一八

一九一八年

計 七四八
一、五八八

五、〇四〇

敵航空機の空襲が都市に及ぼすであらうといふ豫想は彼我共に行はれてゐたのであるが、空襲下の都市をいかにして防衛するかといふ問題の發生は、ドイツの飛行機と飛行船が猛烈に英佛首都を攻撃するやうになつてからのことで、その緒戦時代には考慮されてゐなかつた。獨機が一九一四年八月から九月にかけて、パリを攻撃した當時、地上からは僅か數門に足らぬ改造火砲や小銃だけの射撃で空中に脅威を與へるものではなかつた。これはそのまま英本土であり、ドイツ國內の有様に通ずるものであつた。

しかし、航空機の活躍が次第に活潑となり、都市空襲が本格的に行はれるやうになつたことにともなつて、防空手段も生溫い方法では、その脅威からまぬかれることができなくなつたので、こゝに積極的方法による防空と消極的防空手段の

考慮が拂はれるようになった。

こゝにおいて先づ防空飛行隊が生れ、敵機の一機だに侵入をゆるさないうために哨戒と邀撃戦が行はれるようになった。一方、地上防空隊は高射砲や高射機銃で彈幕を張るといふやうな方法をみるにいたつたわけであるが、これ等の施設が次第に効果を發揮しはじめると、彼我共に目的を安全に遂行するための手段として、夜間空襲を決行するようになったのである。

重い爆彈を積んだ爆撃機のスピードは輕快な戦闘機の敵ではないから、自然、邀撃機の餌食となりやすかつた。そこで安全に攻撃を遂行するといふ目的が、暗夜の空に機影を秘匿して、敵機の邀撃や地上砲火を避けるために夜間空襲の途がえらばれたのだしたわけである。こゝにおいて照空燈や聽音器の必要を生み、射撃一點張りの地上防空は、さういつた補助的機關が必要となつた。

また専ら射彈觀測や哨空任務に活用されつゝあつた繫留氣球は、夜間空襲の發

達にともなつて新しい任務を生んだ。即ち、阻塞氣球の出現がこれである。それから都市の燈火を滅して、その所在を秘匿する方法や偽装手段も構ぜられるようになった。いづれにしても、新しい攻撃手段が発見せられると、これに對抗する防禦手段が直に考慮されていくわけである。

かういふやうにして、前大戰の防空方法は發達していつたけれども、その規模は近代に比して九牛の一毛にも足りないものであつた。今次の日支事變に際し、蔣軍が廣東市内の軍事施設を防禦するために設けた高射砲陣地は三十個所を越え、高射砲ならびに機關銃の總數は百五十門以上、他に對空火器の施設が十二、三個所あつたと報せられてゐる。これに比して、一九一七年十一月、パリ防禦の地上防空部隊が有した高射砲數は、僅に四十五門であつたことをもつても、その規模の一端を窺ふに足ることができらうであらう。

ともかく第一次大戰は、空軍の威力と都市空襲の脅威とに對する痛切な認識を

植ゑつけたのである。そして、戦局全般の慘禍から解放され、世界に平和が立ちかへつたと思つたのも東の間であつた。國際關係の複雑微妙な推移にともなつて、世を擧げて未曾有の空軍大擴張時代を現出する一方、空中化學戦に對する準備とは、將來戦における後方都市の大空襲と、これにともなつて行はるであらう毒瓦斯攻撃は、まつたく避け難い情勢に立ちいたつた。

この結果は、各國とも都市空襲に備へるための積極的防禦手段の完備に狂奔すると共に、官民一致による民間防空の建設に邁進し、或は、防空施設の充實に、或は、防空思想の普及宣傳に、或は、國家的國民防空機關の設置に大童となり、競つて國民防空の整備に乗り出してきたのである。かくして各國では軍部の防空施設が完備するにつれて、國民の防空運動も次第に熾烈となり、空の脅威より救ふべく世界各國は全努力を傾注するやうになつたわけである。

一方、空中化學戦については、一九二五年十月、赤十字の國際機關が第十二回

赤十字國際會議を開催し、化學戦と細菌戦の禁止條約確立を、更に促進すべく決議すると共に、他方においては化學戦の攻撃に對し一般國民の保護施設の完成に努力すべきことを協定したのである。即ち、對化學戦民衆保護國際專門委員會を組織し、一九二八年一月十六日、ブラッセルにおいて、その第一回會議をひらき、化學戦に對する民衆防護方法を研究討議し、その對策を樹立したのであつた。

この決定に基いて、赤十字國際機關は、一九三〇年から實際の活動を開始し、各國政府に對して、救護所の整備、防毒教育訓練の實施、救護組織設定等の實施を勸告すると共に、自ら教育資料の蒐集配布等を行つて、着々その實を擧ぐるために努力してきたのである。この活動にともなつて、各國は次第に眞剣に國民防空の建設につとめ、短期間における民間防空施設の進歩發達は、實に見るべきものがあつたのである。

しかも、それは前大戦で都市空襲の慘禍を味つた國ばかりではなく、またこれ等の國に接壤する國家だけに限らず、實に全世界の文明國家は、いづれも國土保全のための第一前提要件として、國民防空の完璧に萬難を排して努力し、つひに今次世界大戦の勃發にいたるまでには、各國それ〴〵或程度の國民防空施設を完備するにいたつたのである。この間、イタリアのエチオピア攻略、或は、スペインの内亂等における熾烈な空中爆撃戦の實際が、一段と各國の防空熱に拍車を加へたことはいふまでもないことであらう。

眞剣な列強の國民防空

ド イ ツ

ドイツは第一次大戦で、最も活潑に空軍を活用し、將來戦における空軍の役割と都市空襲の必然性を全世界に示したのであつた。と同時に、空軍の整備と都

市防空との必然性を最も痛切に認識してゐたのもドイツであつた。しかし、ヴェルサイユ條約は、ドイツから空の軍備を完全に奪つてしまつたのである。したがつて、各國が競つて將來戦に對處せんがための大空軍建設に邁進する有様をなげめながら、いかなる空中防禦の方法をも奪はれ、その空中脅威は蓋し計り知るべからざるものがあつた。

こゝにおいてドイツは主として宣傳によつて國民の防空熱を促進すべく、一九二〇年頃から防空協會を組織して活動を開始したのが前大戦後のドイツ防空運動の濫觴であつた。しかし、その運動も單なる防空思想普及宣傳の域を越えるなにもものではなかつた。眞剣に凡ゆる桎梏を脱して起ち上つたのは、ヒットラーのナチス政權の樹立以來である。そして、ゲーリングが航空大臣兼空軍司令官に就任するや民間防空及び軍防空の一切は擧げて彼の指揮下に入り、民間航空の統一建設ならびにその完成に對する責任を負ふにいたつたのである。彼はドイツの國狀

からみて、完全な防空施設を急速に實現する必要をみとめ、防空は生活問題であると喝破して、防空施設五ヶ年計畫を樹て、その實現に着手したのである。

更に、ドイツの國民防空發達の上に見逃すことのできないのは、ドイツ國家防空聯盟の活躍である。この聯盟はゲーリングの就任後間もなくつくられたもので、國家的一大組織の上に、ドイツ國民が生存上防空の重要性を確認せしめると共に、家庭防護ならびに國土防衛における實際的協力を行はしめることを任務としてゐる。そして、國家防空の組織編成、教育訓練の實踐に當り、創立早々一大國民運動を展開し、全ドイツ國民は一人の例外なく空襲下における自己の任務を徹底的に教育訓練され、いづれも立派な一人前の國家防空の戰士に仕立てられ、且つ各々の持場と組織とを與へられたのである。

次で、一九三五年二月、政府は再軍備の宣言を行ひ、直に陸海空三軍の整備に着手し、ドイツ防空の體形ができ上つたので、つひに同年六月防空法を發布し、

こゝに法律上國民防空施設は、その完備の域に達したのである。ともかく以上のやうにして、軍官民打つて一丸となつての防空建設への努力は、つひにヴェルサイユ條約下何等の防禦なくして、空襲下の脅威にさらされたドイツをして世界にほこる鐵壁の國土防空陣を完備せしめ、今次の世界大戦においては、堂々たる自信をもつて戦にのぞむにいたつたのである。

フランス

フランスはイギリスと共に、第一次大戦間もつともがい經驗をなめた國の一つであつた。したがつて、將來戦においては、空軍と防空とが決定的なものであることを痛感し、軍部では夙くから空軍の整備擴充と積極的防空の充實に力を注ぎ、これに對する研究に逸早く着手したのであつた。

一方、國土防衛には國民組織の完璧に俟たなければならぬことに鑑み、一般國民の自家防空、並に、有事に際して産業地帯等を防護すべき基準を與へるため、

一九二三年八月、内務省からこれに關する詳細な指示を發布して、國民防空の建設に第一步を印した。同時に、民間防空委員會ができ、専ら國民の防空思想普及に當つたのである。しかし、前大戰においてにがい經驗をなめたフランスも、當時は未だ一般が耳を傾けず、國民防空運動としては、特に見るべきものゝない有様であつた。

かういふやうなわけで、フランスの國民防空は、當時、一時中絶のすがたとなつてゐたのであるが、その後國際情勢の複雑化と列國の防空熱の昂揚とに刺戟を受け、つひに軍部の指導によつて各地に民間防空團體が續々と設立され、漸く活潑な行動を開始したのである。しかし、陸軍、空軍、内務三省の間に所管に關する意見の衝突があつて、再び停頓をみるにいたつたのであるが、國際情勢の複雑性が日一日と加はる一方、各國空軍の整備と防空施設の充實は、日と共にさかんとなる傾向に鑑み、やがて國土防空に關する分掌範圍も決定し、一九三〇年から

多額の防空豫算を計上して、五個年計畫で防空施設の完成をめざし、着々その實現につとめ、こゝにフランスの國民防空も本格的な軌道に乗ることができたのである。

一九九三一年二月には、防空の統一指導のため國防最高委員會をして諸官省の實施してゐた防空業務全部を掌握せしめることにした。この衝に當つたのはベタン元帥で、こゝに同元帥は國土防空總監として、防空に關する一般企畫や豫算に關する統制をはかることゝなつたのである。

これより新たな法令とか組織によつて、フランスの國民防空組織が確立したのであるが、一般國民は未だ稍々もすれば實際的に追隨しなかつたのみならず、國內の輿論も亦防空施設に對する宣傳は、ドイツに對し戰爭の挑發を行ふものであるといふ見地で全く冷淡であつた。そこで政府は、防空宣傳、防空教育の必要であることを痛感し、別に防空宣傳委員會を設け、防空に關する宣傳とか各種防空器

材の説明をなすほか凡ゆる學校において防空教育を行ひ、一方には赤十字社の果敢な活動を促したのである。

フランスでは、このほか防空の普及に關係のある民間團體の数が非常に多かつたのであるが、一九三四年の春、政府はこれ等諸團體の主なるものを統合して、防空國民聯合會を設立し、なんらの統制もなかつた諸團體の歩調を一にし、爾後は講演とか防空訓練の講習會によつて、國民に對する普及の徹底化をはかつた。次に、國民の教育宣傳に關しては、防空演習を絶えず繰返して實施したことも非常に與つて力があつた。殊に、これ等の防空演習では空軍が積極的に參加し、その効果は大いにみるべきものがあつた。

これより今次大戰にいたるまでフランスは、あらゆる手段を講じ全力をつくして専ら民間防空の充實に力を注ぎ、銳意完璧を期したのである。次で、今次大戰勃發直前、二、三の防空に關する法令を發布し、もつてフランスにおける消極的

防空の組織、準備、實施等、あらゆる防空分野に關して詳細に規定して、名實共に國民防空體系を確立し、今次の戰爭では専らこれ等の訓令に基いて各般の事項を實施したのであつた。

イギリス

前大戰に當つて都市空襲の脅威についてはフランス以上に苦い經驗を持つてゐるイギリスであるのに拘はらず、同國の防空とくに民間防空は、他國にくらべて著しく着手がおくれたのである。しかし、將來戰における空軍の重要性に關しては、はやくから軍部方面において痛感され、これに對する整備と對策とが叫ばれてゐた。かうして、政府の關心は、専ら積極的防空方面にだけ向けられ、消極的防空としての國民防空は殆ど輕視されてゐた觀があつた。加ふるに國民も亦はなほだ冷淡で、何等これに關與することがなかつた。

特に、前大戰中ロンドンの經驗したやうな空襲を受けた後には、國民の防空精

神が眞先に前提條件となるべきであるのに拘はらず、國民は少しもこれに關與しない状態であつた。一九三五年、政府は防空の必要性和防空施設の缺陷をみとめ、一大改革を行ふべく活動を開始し、先づ空軍増備の一大計畫を樹立すると同時に防空法を制定して、國民防空の組織體系、民間防空施設の完成に乗り出し、内務省に防空局を設置したのである。

これより特にガス防護に力を入れ、一九三七年には既に九百萬に上るガス・マスクを用意するといふ有様ではあつたが、他の自家防空といふやうな方面の整備統一は零に近かつた。かういふ状態にあつたとき、突如として勃發し英國朝野の眠をさましたのが、一九三八年九月のチェッコ問題の危機であつた。英獨開戦の危機に直面して、政府も國民も俱に、防空施設の缺陷、國民防空組織の未完成、防空教育の不足を直視して今更ながら驚愕狼狽しなければならなかつた。

かくてチェッコ問題の危機が通過すると共に、政府は、防空施設充實の急務を

痛感し、俄然、軍防空ならびに國民防空の短期完遂に向つて積極的に乗り出したのである。かうしてイギリスの國民防空は、チェッコ問題當時における苦い経験と市民側の非難とに刺戟されて、はじめて本格的に、その実績を向上し、なにものを犠牲にしても先づ防空といふ意氣込みでつくり上げられたのである。

これより第二次大戦の勃發にいたる間における政府當局の努力は、實に見るべきものが、つひに一九三九年七月には、ともかく他國に比しては遅れ走せながら、その計畫の八分通りを完成し、一通りの準備陣を布いたのである。この一ケ年足らずの間における政府の拂つた必死の努力は、その実績の上において優に他國の數ヶ年分のそれに相當したといはれてゐる。

即ち、一九三八年十一月一日には、それまで内務省の一局で擔當してゐた防空業務を國爾尙書アンダーソンの直轄に移し、各省各機關の防空關係業務を總括統制せしめ、全國津々浦々にいたるまで網の目の如く國民防空組織を完成し、他方

防護團特別勤務隊を編成して人的組織體系の完璧を期すると共に莫大な豫算を支出して、市民防護施設の完璧を期し、併はせて廣汎な防空實施計畫を完成して、いついかなる事態が発生して水も洩らさぬ防空陣を展開せしむべく準備を完了した。即ち、以上が今次大戦直前におけるイギリス民間防空の姿であつた。

イタリヤ

イタリヤの國民防空建設に對する努力の主なもの、先づ一九三四年三月五日發布の伊國防空法である。この法律は或程度まで多數の法律的諸規定をまとめ上げたもので大部分は、既に數年前に發布せられたものであつたが、イタリヤが従前からいかに熱心に防空施設に對する努力を續けてきたか、最もよく證明せられるものである。

特に、建築問題には特別ちからが注がれ、はやくから一流建築家や専門家は、この問題のために動員され、いづれも基本的で且つ廣汎な結論が次々と發表され

てゐた。イタリヤの防空法は、根本的に防空の意義及び防空の組織體系を確立した劃期的なものであり、こゝに國民防空の基礎が固められ、爾來、これに基いて着々とその完成を急いできたのである。

イタリヤ國民の防空についての關心は、相當に積極的なもので、政府の努力に相俟つてよくこれに協力し、今日のやうな防空陣を築き上げたのである。最近までの數年間に亘つて、イタリヤは何回となく防空演習を施行し、しかも常に空軍ならびに領土防空の演習と連絡して實施してゐるが、その実績は極めてよく、殊に市民は積極的に参加し、フランスその他に見るやうな市民の不參加やサポーターは未だ一同もみられない状態にあつた。

ソヴェート

獨ソ開戦にともなつて、ソ聯の各都市はドイツ空軍の猛烈な空襲下にさらされてゐるが、特に獨地上軍の完全包圍下にあるレニングラード市民の徹底した國民

防空意識は天晴といはなければならぬであらう。ソ聯は、國民防空の必要性を夙に認識し、近代戦に對する防禦施設の完備をめざして各種の設備を行つてきたことは周知の事實である。

國民防空機關としては、はやくから國防飛行化學協會（オソアビアヒム）がある。この協會の事業は著しく廣汎で、他國のいはゆる防空協會組織とは趣を異にし、政府の指導ならびに國庫の補助を受けて維持せられる會員組織で、その活動は極めて積極的であり活潑であつた。即ち、他國のやうに國民の宣傳、教育訓練のみにその任務を止めず、飛行機ならびに化學兵器の進歩發達を援助するのを主目的とし、同時に全國青少年軍事教育及び一般國民の軍事化にまで活躍してきた。したがつて、オソアビアヒムは必要によつて大工場を指揮して、同協會に必要な資材を満たし得るやうにすると共に、防毒面、小銃、各種教材製作のための大專屬工場を持つてゐる。要するにソ聯國民に戰闘準備を整へさせる抵抗力を持た

せるやうにするのが、その任務であり、國民に對する防空教育はこの國防力養成ならびに教育の一部として行はれてきた。ソ聯は、過去幾年間に亘り、幾回となく大防空演習を実施し、また宣傳のために、オソアビアヒムは陸海軍をも使用しラジオ、映畫、講演、印刷物等あらゆる手段をもつて教育に當つてきた。特に、防空演習に當つては工場従業員は演習地で演習期間中作業を免ぜられ、自らこれを見學し、空襲の意義ならびに防空の可能性に關する確信を得る如くに訓練されたのである。

またガス防護には特別意を用ひ、工場従業員をして幾回となくガス・マスクその他防毒資材を使用せしめて、常に業務に従事せしめ生産能率の低下をふせぐ訓練を行つてきたほか、オソアビアヒムによるガス訓練實施、ガス研究所の設備、研究會、ガス學校、ガス講習會の開催、或は、アビアヒム瓦斯防護隊員の養成等幾多の努力をはらひきたつたものである。

わが日本の国民防空の組織體系の基本を定めたものは、即ち、防空法である。しかし、これに先立つて軍當局指導の下に、軍官民協力によつて各地でさかんに防空演習が実施され、国民の防空認識は日毎に昂められつゝあつたのである。しかしながら国民防空に關する根本の體系が確立してをらず、防空演習の主體、一般國民への強制力の程度、經費の負擔區分といったものも判然とせず、且つまたその指導等においても責任系統その他が一貫せず、種々の方面に徹底を缺く憾が少くなかつた。

しかるに一方國家内外の情勢は次第に緊迫の度を加へ、國際關係の複雑な推移は一日も樂觀をゆるさず、国民防空建設の緊要性が日毎に加へられるにいたり、かくて帝國議會における防空法制定に關する建議もあり、つひに政府は昭和十二年國民防空基本法である防空法案を議會に提出して可決され、同年四月、こゝに

はじめて防空法が制定公布されるにいたつたのである。

しかし、防空法の制定後、未だ施行勅令の公布されないときに支那事變が勃發し、國土防衛上一日もはやく同法の施行が急務とせられ、急遽、施行勅令その他の各種關係法令を整へ、漸く同年十月一日から防空法は實施される運びとなつたのである。こゝにおいて名實共に我が日本の国民防空に組織と體系とを與へる基礎が打ちたてられ、各責任機關は整備され、防空計畫の樹立、防空設備資材の整備、國民の教育訓練の徹底等、着々とその堅實な歩みが運ばるゝにいたつたのである。いふまでもなく、国民防空の中樞は内務大臣である。そして、その統括下に責任の衝に當るものは、地方長官、市町村長で、国民防空管掌の局として、最初は内務省計畫局がこれに當り、本年秋新に防空局が設置されるにいたつた。また防空に關する最高諮問機關として、内務大臣を會長とする中央防空委員が設けられ、關係官公衙ならびに民間の權威者を網羅して、重要事項の調査審議に當つ

てゐる。そのほか内務省には、防空専門委員の制度が設けられ、防空各部門の専門家をこれに任じて、基本的事項の調査に遺憾なきが期せられてゐると共に、昭和十四年、中央に防空研究所を設置して、常時防空に関する専門事項の研究に當らしめ、複雑にして多岐に亘る防空各部門にそれ〴〵適切な解答と対策とを構せしめてゐる。

わが國における防空の補助機關としては、從來から消防組と防護團との二本立であつたのであるが、昭和十四年にこれを統合して新に警防團が組織され、責任機關を中心として、その統制下に秩序ある活動を行ふべく改組された。他方、國民各自の自衛的な防空についての近隣團結の隣保組織は、わが國の如き構築様式の都市には、その必要性が特に大なることに鑑み、責任當局の指導育成の下に、家庭防火群の組織的結成をみるにいたつた。

また、大工場、學校その他には、所謂、工場防護團、學校防護團等の設置が行

はれ、官廳防空の分野においては、それ〴〵の部門毎に十分な官廳防空組織と官廳防空計畫とを整備して、これが対策の萬全に努力してゐることはいふまでもない。

次に、一般國民に對する防空教育、防空思想普及の方面においては、昭和十四年、總理大臣を會長として、大日本防空協會が設立され全國各道府縣に支部を設け、凡ゆる方法をもつて防空思想の普及徹底化をはかると共に、各種の調査研究防空資材設備の整備の補助、その他政府事業の援助に全力をつくしつゝあることは周知のことであらう。

かくて一般國民の防空に對する認識は、日と共に昂り、既往に數次繰返して行はれた實戰的訓練の反覆によつて、官民共に防空業務に慣熟し、防空計畫の一大充實を來してゐるのである。また支那事變の推移と歐洲戰局の刺戟によつて一段と拍車を加へつゝあつた折柄、太平洋に妖雲がわだかまり遂に一觸即發の態勢下

に置かれた國民の防空精神は益々さかんとなり、わが國の空を掩ふて來るいかなる翼の大群にも動ぜざる鐵壁の防空陣が布かれてゐるのである。

近代の爆撃機と第二次大戦

航空技術の進歩と爆撃機

前大戦後二十年の経過は、文字通り航空界が日進月歩した。今日における航空機の性能は、當時の誰一人想像し得なかつたものである。しかも従來の記録といへば、いづれも記録を目的として特別に製作されたものによつたのである。しかし現在では實用機がその第一線にたち、國際記録といへば、直に實用機であることが近代の常識となつた。第二次大戦の勃發と共に、しばし航空記録戦は中止のかたちとなり、軍用機中心に製作技術向上の時代となつたが、前大戦四ヶ年の日子が、飛行機の向上に資することが大きかつたと同じやうに、今次の世界大動亂

が航空の全般に大きな躍進の跡を示すであらうことは論を俟つまでもない。
いま飛行機による世界の最高公認記録をみると、

速 度	高 度	周 回 距 離	真 線 距 離	獨	伊	伊	英
七五五、一三八(軒時)	一七、〇八三米	一三、九三七・七七軒	一一、五二〇・四二一軒	一九三九年	一九三九年	一九三九年	一九三八年

前大戦當時、最も速度のはやい戦闘機でさへ時速二百軒前後であつた。高度において六千米、爆弾の搭載量で一千瓩、航続時間四、五時間程度のもものも出現したが、その数は微々たるもので論ずるに足るものではなかつた。それが右のやうな一大飛躍をみたことは、航空技術の一大進歩であることのほかなにもものでもない。

これはいふまでもないが、前大戦後はなばなく展開された國際航空爭覇に各

國の技術者が全力を傾けて性能の向上に努力した結果がこゝに現はれたものである。そしてこれを具體的にみれば、下げ翼、引込脚、過給發動機、可變ピッチ・プロペラなどが算へられ、飛行機の性能向上からみれば劃期的なものといひ得る諸装置が續々と實用に供され、それ等を綜合した近代の低翼單葉が出現したからである。そして、最も注目しなければならないのは、各國が成層圏航空へのためまざる努力を行つてゐることである。即ち、抵抗の少い一萬米以上の高空を征服して、快速を獲ようとするためのものである。これによつて近代の大型飛行機はほとんど四、五千米の高度以上において最大性能を發揮し得るようになつてきてゐる。特に長距離爆撃機は、地上火器の防禦砲火を避けて、安全に目的物の爆撃を行はんがためにも、この超高度を利用する傾向にある。

近代の進歩した爆撃機の色をみると、今日の戰場に活躍してゐる十噸以下の急降下攻撃機を含む代表的な、英、米、佛、獨、伊、五ヶ國四十九機の内、最

大時速五百糎以上のものが八種類に上り、ドイツのメッサリシユミット M・e 一〇型の五百八十五糎といふのが最大である。

そして、その平均時速は四百五十餘糎であるが、最近、新に登場した新鋭機においては、いづれもメッサリ級と思つてよい。十噸以上の哨戒飛行艇では、米のノース・アメリカン N・A 四〇 A 型の五百糎、「空の要塞」といはれるボーイング B 一七型は五百八糎を出してゐるが、一般をひつくるめた時速の平均は四百糎に達してゐる。この數字は、前大戦當時に比較して、時速三・〇—三・五倍の増加である。

このやうに近代の爆撃機は、非常に高速度を出し得るようになった關係上、戦闘機と輕爆撃機で比較するも、兩者の速度差は、略々、四、五十糎前後となり、重爆撃機とは約百糎近くである。この結果、前大戦當時のやうに、戦闘機が爆撃機を空中で捕捉することが困難となつてきた。假令、捕捉したとしても、第一撃

後の反覆攻撃といふものが、殆ど至難といはれてゐる。

前大戦の際には、地上防衛の方法が進むにしたがつて、晝間の空襲が思ふやうにできなかつた。これは敵戦闘機の妨碍を受けて、その損害が多であつたからである。したがつて前大戦の後半にいたつては、主として夜間の空襲が行はれるやうになつたのであるが、今日の爆撃機は、その高速度と高空に位置を占めて、たくみに敵防空戦闘機の攻撃を回避しつゝ空襲を行ふことができるのである。また、一度目標の上空に達すれば、急降下を行つて低空爆撃を敢行するわけであるが、いはゞ爆撃機が高速度化された自信にはかならない。

いづれにしても、近代の爆撃機が高速度化したことは、空襲を妨碍する戦闘機や高射砲などの防空機關の攻撃を回避し、或は、これを輕減することができるやうになつたから、空襲の實行を益々容易ならしめるにいたつたわけである。したがつて、新鋭爆撃機は、舊式戦闘機の速度をはやくも凌駕する趨勢をたどり、かへ

つて戦闘機の速度増加に腐心する情況を呈してゐるかの觀がある。

將來、列強の爆撃機が武装の強化と共にこの域に達すると、戦闘機の妨碍を顧慮する必要のないのは勿論、高射砲の射撃も益々困難となつてくるので、これに對する防空は、從來の受動的な方法では、殆ど不可能に近い趨勢下で置かれてゐる。この受動的缺陷に對する事實も亦、日支事變における支那の主要軍事據點空襲、或は、ドイツが今次大戰に行ひきたつた爆撃の實際等においてこれをみるこゝとができるであらう。

また、爆撃機の性能が増大したことにもなつて、その行動半径も亦昔日の比ではない。前大戰當時における重爆撃機の航續時間は、僅に四、五時間であつた。それが今日では十時間から二十時間以上の行動が普通とされ、目下世界的注目を浴びてゐるといふよりは、既に、わが東亞共榮圏の空を脅かさんとする態勢にあるアメリカの重爆撃機ダグラスB一七型は、ニューヨーク、ロンドン往復を可能

とする一萬一千軒の航續力と、實に二萬五千五百軒の搭載量を有してゐるのである。

いづれにしても、大戰當時の爆撃機が八百軒から一千軒程度の搭載量であつたものが、今日の一般標準の爆撃機でさへ、三千軒から六、七千軒に増大してゐるので、その空襲火力量の増加に伴ふ破壊威力は昔日の比ではない。また、ドイツがイギリスの海上艦隊を向ふに廻はして活躍を開始して以來、絶えず報導されるのは、急降下爆撃機の驅使によつて、イギリス艦隊の行動を牽制すると共に通商破壊戦にしたがひ艦船の多數に對し重大損害を與へつゝあることは、文字通り大規模に行はれる都市空襲と共に、遺憾なく近代空襲威力の實相を物語るものとして記憶しなければならぬ。

爆撃機の装備と任務

過去の爆撃機は、その武装も單純で戦闘機の掩護が必要であつた。しかし、今日の爆撃機は航続距離の増大によつて、敵國の奥地ふかく活動することができるようになつたから、航続距離の短い戦闘機の掩護によつて活動することが困難となつた。したがつて、單獨で敵の防空戦闘機と雌雄を決す場合が多いため、大型機等の場合には、その武装も前後左右上下の六方向に機關銃を装備して死角が零になるように工夫されてゐる。

また、飛行機が長距離飛行を行ふ場合には、漠々たる雲海上の飛行、或は、濃霧、雨雪、強風等の氣象的妨碍を克服して、常に正確なコースを保持して目的地に達しなければならぬ。これがためには、夜間の天測航法をはじめ各種の空中航法が必要である。これを扶けるために發達したのが、所謂、無線航空で、長距離爆撃機には無線の方向探知器が装備されてゐる。方向探知器は、地上根據地から發信せられる電波によつて、自己の位置や方向を絶えず正確に保持することが

できるもので、根據地との連絡用には無線も亦携行されることは勿論である。

一方、長時間に亘る飛行は、操縦者を非常に疲勞せしめる。この疲勞を防ぐ手段のために發明されたのが自動操縦装置である。これは、ジャイロの原理を應用したもので、油壓又は電動をもつて自動的に機體の姿勢を保たしめるものであるが、兩者の發明は、いかなる悪條件の飛行をも容易ならしめるために、爆撃機の空襲威力を倍加せしめる結果となつた。そのほか爆撃効果の確認とか偵察のための航空寫真機、保安用器材としての落下傘や酸素吸入器、或は、機上消火器も亦近代の爆撃機には必須的な装備品となつてゐることはいふまでもない。

要するに爆撃機が活躍する場合には、各種爆弾のほかさういつた武装や装置が必要であると共に、その任務も多種多様に亘つてゐる。そこで、その目標の大小航空範圍の遠近等によつて大別されてゐるのが、輕爆撃機、重爆撃機、超重爆撃機で、海軍ならば一般爆撃に用ひる攻撃機、艦船攻撃を目的とする雷撃機、或は

飛行艇の場合の哨戒爆撃といったやうに區別される。
 急降下爆撃機は、その機體性能の特徴に對して名付けられたもので、輕爆撃機
 の一種に過ぎない。

輕爆撃機……この飛行機は、通常、四、五百磅の爆弾を搭載して活躍する。他
 の爆撃機に比較すると航続距離が短く搭載量も少いが、その運動性能が割合に輕
 快であるから、その特徴を利用した方面に利用されて、地上作戦に協力するとき
 などに多く用ひられる。また、この種の飛行機は單に爆撃を行ふだけに止まらず、
 偵察や低空掃射等にも活躍するので、偵察爆撃機といったやうに二用途の名稱を
 持ったものもある。次に今次大戰に活躍中の主な輕爆撃機の性能を掲げてみる。

列強輕爆撃機性能概見表

名 稱 馬 力 速 度 (軒) 航 続 距 離 (軒) 上 昇 限 度 (米) 武 裝 爆 弾 (磅)

イギリス	ハリストル・ブレン ハイム四二M一型	八四〇 二基	四五八	一、六〇〇	一〇、〇〇〇	機關銃 二	六五〇 九〇〇
	ハンドレーページ・ ヘンブデン	一、〇〇〇 二基	四五三	一、六〇〇	九、四〇〇	機關銃 二	五〇〇
アメリカ	ブルースター一三八 型	九五〇	四八六	一、二五〇	九、一五〇	機關銃 三	
	ノース・アメリカン NA一四四型	一、〇五〇	四五〇	一、四〇〇	八、八五〇	機關銃 五	一八〇
ドイツ	エーロA一三〇〇型	八四〇 二基	四七〇	九〇〇	八、三〇〇	機關銃 三	一、〇〇〇
	メッサーシュミット Me一〇型	一、一五〇 二基	五八五	二、七五〇		機關銃 五 機關砲 二	
イタリア	ブレダ八八型	一、〇〇〇 二基	五五五	一、八〇〇	九、〇〇〇	機關銃 二	
	ファイアットCR二五型	八四〇 二基	四六〇	一、五〇〇	九、八〇〇	機關銃 二	

重爆撃機及び超重爆撃機……この二種の飛行機は、多量の爆弾や大型爆弾を搭載して、大行動半径に物をいはせて敵の奥地へ侵入するのが目的である。そして敵國の軍事、經濟、政治の中樞要地を撃碎するのは勿論、航空基地、重要な交通施設、或は、軍隊の集中地といったやうな、敵の作戰上に重大な影響を與へる要地、要點に對する爆撃を敢行して、敵の作戰を破滅に導き、且つ敵國民の戰意を喪失せしめるといふやうな、所謂、戰略的任務に服するものである。今次大戰に活躍中の主なものゝ性能を掲げてみる。

列強重爆撃機性能概見表

名	種	馬力	速 (km/h)	航続距離 (km)	上昇限度 (m)	武裝	爆 (kg)
ボーイングB一七型	IIイギリス	1,000	424	4,120	18,000	機關銃六	2,400
XPBニヤ一型		1,200	480	4,800		機關銃五	4,000
ダグラスB一九型 (100噸型)		2,000	485	9,600		機關砲五	20,000
ヘインケルHe一型	IIドイツ	1,150	422	4,250	7,300	機關銃三	2,000
ユンカースJU八九型		1,175	360				
サボイヤ・マルケツテイSM九七型	IIイタリヤ	1,000	475	6,800	8,500	機關銃四	1,665
テーパー五型	IIソヴェート	950	250	2,000	7,000	機關銃五	2,000
テーパー六型		950	400	2,000	8,000	機關砲二	3,000
ビツカースウイリントン一型		1,000	424	4,120	18,000	機關銃六	2,400
シヨートサンダーランド哨戒艇		890	336	2,850	4,800	機關銃七	

名	種	馬力	速 (km/h)	航続距離 (km)	上昇限度 (m)	武裝	爆 (kg)
ボーイングB一七型	IIアメリカ	1,000	432	6,760	8,700	機關銃五	3,000
XPBニヤ一型		1,200	480	4,800		機關銃五	4,000
ダグラスB一九型 (100噸型)		2,000	485	9,600		機關砲五	20,000
ヘインケルHe一型	IIドイツ	1,150	422	4,250	7,300	機關銃三	2,000
ユンカースJU八九型		1,175	360				
サボイヤ・マルケツテイSM九七型	IIイタリヤ	1,000	475	6,800	8,500	機關銃四	1,665
テーパー五型	IIソヴェート	950	250	2,000	7,000	機關銃五	2,000
テーパー六型		950	400	2,000	8,000	機關砲二	3,000

なほ、右のうち米のダグラスB一九型は、全備重量百噸といふ超大型爆撃機として全世界の注目裡に完成され、最近處女飛行が行はれたばかりであるが、はたして實戦に使用して所期の性能を望み得るか否かは今後の問題とされてゐる。と同様に列強では、次々に新作機を登場せしめ、その性能を誇らんとしてゐるが、その詳細に亘つてのデータはつまびらかではない。

たゞ注意しなければならぬのは、現用の大型旅客機も亦そのまゝ少しの改造によつて、直に爆撃機として活躍し得ることである。要するに各種軍用機の性能は、かならず他を凌駕することが原則であると共に、これをよく運用し得る操縦者の人的保有量と生産能力が奈何かといふ點こそ、空軍勢力の強弱を卜する岐路があるわけである。

日支事變と世界驚異の渡洋空襲

わが空軍史を辿れば、その最初の空中爆撃の経験は青島戦であつた。参加した飛行機は、陸軍のモリス・ファルマン式七十馬力が四機、ニューポール式八十馬力一機、海軍がモリス・ファルマン式七十馬力が三機、同百馬力一機で、敵はルンブラー式一機であつた。このとき陸軍機が敵の頭上を飛行したのは三十九回で、爆弾投下同数が十五回、投下した爆弾の数は四十四個であつた。しかも、その方法たるやいづも手投げ式で、爆弾も亦小型であつた。當時、灣内に停泊中の敵一巡洋艦に落ちた爆弾が不發のまゝ甲板を轉がつたといふエピソードも遺されてゐる。

それはともかく、爾後、シベリヤ出兵、並に、滿洲上海事變を経て、昭和十二年に日支事變の勃發となり、こゝに我が陸海軍の鵬翼が全支に羽搏いて以來、瞻目的な活躍をみつゝ今日にいたつたわけである。その最初の第一弾は、昭和十二年七月十六日の拂曉、北寧線朗坊の敵陣に加へたものであつた。これよりこゝに

丸四ヶ年の月日が硝煙が流れ去れ去つたのである。そして打倒抗日の戦火は、北支から中支へ、更に南支へと燎原の火と燃えひろまつて、支那大陸を南北に貫通する戦線は今や四千六百軒に及び、渤海灣から黄海を経て南支那海に伸びる海上封鎖線は蜿々として五千軒に達する曠古未曾有の大戦線を展開してゐるのみか、いまや敵性A B C D線の蠢動に對して、一大鐵槌を加ふべき態勢下にあることはいふまでもない。

わが陸海軍の航空部隊が今次事變に行つてきた空中爆撃戦は、先づその最初は地上協力戦に終始し、この間、隨時敵の航空基地を爆碎し、或は、空中の敵を捕捉殲滅して完全な制空權を握つて地上部隊の戦闘を助け、一方には要地の防空に任じたのであつた。また昭和十四年五月十一日に突發したノモンハン事件に際して、六月二十七日のタムスク飛行場空襲は特筆すべきものであつた。

陸軍航空部隊が本格的に攻略的攻撃を開始したのは武漢作戦後で、海軍航空隊

と協力、敵の軍事的中樞である重慶、昆明、蘭州、成都、西安等をはじめ支那全土に亘る奥地攻撃を現に續行中である。一方、歐洲において行はれつゝあるドイツ空軍の物凄い爆撃振りに瞠目する人が多いけれども、今日の飛行機をもつては河川にも等しくなつた英佛海峡を横斷してロンドンを爆撃したり、或は、猫額的な歐洲の戦場で各都市に行ふ空襲の如き比ではないのである。

一例を重慶にとつてみれば、ロンドン攻撃の數倍もある遠距離を、しかも長い間に亘つて重疊たる山嶽や悪氣流を冒して敵地の上空を突破しなければならぬのである。この歐洲戦においてはみなれない長驅爆撃には、不可缺といはれる三つの條件がある。それは、優秀な機體、技倆の練達、乗員の不撓不屈の精神力、この三條件の總和が全支を日章の鵬翼下に摺伏せしあるにいたつた重大な要素で陸海軍共に共通であることはいふまでもない。

かくて昭和十六年四月には、歴史的な佛印進駐が行はれ、陸鷲の基地も亦堂々

の南進を行つた。爾後、長驅してビルマ・ルート、並に、昆明をはじめ雲南各地の軍事施設を猛爆撃し、それ〴〵甚大な戦果を挙げつゝあることは生々しい印象であらう。北支郎坊の兵營に巨弾の雨を降らせて膺懲の火蓋を切つて以來、かくて我が陸空軍の活躍舞臺は、北は蒙疆のはてから、北、中、南支、佛印に亘り、地域の尨大さは、世界空中戦史上無比のものとなり、その延出動機数は十萬餘機に達し、重慶はじめ敵の要地三百數十ヶ所に投下された巨弾の雨は〇萬噸に達するのである。

一方、わが海軍航空隊は、昭和十二年八月十四日、敵は小癩にも我が艦船や陸戦隊本部、總領事館などに對して盲爆を加へきたつたのに對し、軍艦出雲の艦載機が敵の三機を撃墜し、先づ劈頭の武勳を樹てたが、同日午後つひに勘忍袋の緒を切つた海鷲は、突如、彼の渡洋大空襲の歴史的な一大壯舉を敢行して全世界を瞠著たらしめたのが、海空軍の眞價を誇る緒戦であつた。

これ以來、歴戦を重ねること第五年を算へて、海の荒翼が支那四百餘州のいかなる空と雖も羽搏かざるなく、五千裡に亘る海上の封鎖陣はいふもおろか、太平洋の風雲の急なるに備へては微動だにせぬ鐵壁の用意をもつて海の彼方を睥睨してゐるのである。かくて大陸の奥地へは今なほ一刻の想もなく猛鷲の羽搏きを續け、昭和十三年二月、第一回の重慶空襲以來、實に回を重ねること九十回を突破し、蘭州、成都、昆明、或はビルマ・ルートの遮断といったやうに、その主要都市に對するだけの爆撃行だけで、實に百數十回を算へるのである。

これによつて陸軍航空部隊の活躍と相俟つて、抗日政權の鐵鎖にひしがれた重慶市民をはじめ各主要都市の市民を恐怖のドン底に叩き込み、その打撃は深刻を極めてゐるのである。殊に、昭和十六年度における爆撃は、從來に見なかつた苛烈なもので、重慶周邊に群立した兵器工廠、軍需品倉庫、或は、その他の軍政黨中樞機關が逐次喪失し、破壊後に來る恐怖と混亂は、重慶政權を最惡の事態に直

面せしめ、幾度か奥地への遁走を傳へられるほどのものであつた。また、海鷲の援蔣路爆撃は、陸上作戦の進展、並に、海上封鎖作戦の嚴密化と相俟つて、蔣政権を一步步々窮地に追込みつゝあるが、重慶の迷夢は未だ醒めず、過去にソ聯をも加へて英米の援助を一段と利用し餘命を保つてゐるのである。

さて、海軍航空隊の活躍の跡を回顧すれば、その殆どが世界の意表に出でた華なものであつた。昭和十三年八月十四、五日の渡洋空襲は、支那海の中心示度七百二十耗といふ颱風を衝いで決行され、その烈々たる攻撃精神と相俟つて、世界中戦史未曾有の記録を止めたものであつた。これによつて敵の首都南京をはじめ、各地の敵空軍基地を撃碎、地上空中の敵數十機をも血祭に擧げた壯烈極りなものであつた。

これより海軍航空隊は、次第に活動範圍を擴大しきゆき、支那大陸のいたるところにおける重要據點を爆碎し盡し、重慶だけを算へても九十回を突破するに

たつたことは既に前に述べた通りである。また、昭和十五年以來、陸上作戦の進展、佛印進駐、重慶の破壊、沿岸封鎖の強化、滇緬公路の遮断等によつて、重慶政府の政治的、經濟的、軍事的の逼迫は急を告げ、今日なほ辛うじて餘命を保ちつゝあるのは、英米の援助にはかならないのである。

これを要するに、日支事變における空中爆撃戦は、全く我が空軍の一方的活躍に止つてゐるが、その規模の雄大であること、正確無比な手練の爆撃は、列強の等しく瞠目してゐるところであつた。今後、A B C D包圍陣がいかなる策動を加へ、事變の進展が遂に太平洋に波及することがあつても、事變五ヶ年の間に鍛へられた爆撃技術と旺盛な攻撃精神とは、かならずや他に類を見ることのできな

い一大戦果を収めて、事變遂行の一大推進力たることは疑ひを容れぬところである。

第二次大戦の勃発と爆撃戦

ドイツのヘルダー少佐は、「空軍の最大任務遂行には、爆撃によつて敵國民の戦争意志を破壊するための凡ゆる手段がゆるされる。戦争は取りも直さず戦争であるからである」といつてゐる。前大戦四ヶ年の経験は、空襲の如何なるものであるか、また將來戦においては如何なる相貌をもつて展開するであらうかを十分に教へ込んだのである。したがつて、國際情勢の變轉に對應するための空軍整備といふことは、各國共に眞劍な努力の對象であつた。

地球の東で日支事變が勃發し、第二次大戦は、一九三九年九月一日、ドイツのポーランド進攻をもつて幕が切つて落された。開戦六週間前にポーランドのスマグリ元帥が、「われ等はベルリンを一時間にして空襲し、精銳なる陸軍をもつて敵首都を指すは決して難事に非ず」と豪語してゐたにも拘はらず、殆ど第一日で完

全に制空權を握られ、ドイツ空軍の活躍を拱手傍觀するはかはなかつた。

ドイツの急降下爆撃機は、大舉して地上友軍の進出に協力し、一方では首都ワルソーに對する攻略攻撃が行はれた。この結果、九月五日には政府機關がルブゾンに移り、再び半日にして猛撃に堪へかねて蒙塵するといふやうな有様の下に戰意は全く失はれ、つひにポーランドは世界地圖から消え失せてしまつた。

次で、ノルウェー作戦、デンマーク攻略の後、一九四〇年五月十日、所謂、白蘭戦線の展開となつた。この白蘭戦線では、ドイツ空軍は益々その威力を發揮して、全戦局の大捷は空軍のためなりといつてもよいものであつた。ドイツは空軍を縦横に驅使するために、先づ制空權を握る必要があつた。第一日行動開始と共に、ブラツセル、アントワープ、ロッテルダム等白蘭國內の空軍基地の合計七十二飛行場を爆撃した。

ドイツは白蘭作戦の遂行を大體五日間と豫定し、略々、この豫定通りに遂行す

ることができたのであるが、その原因は空軍の活躍が大部分を占めるものであつた。ドイツの機械化部隊がロッテルダムの郊外に到着したのは五月十四日であつた。だが、オランダ軍が頑強に抵抗するため市街に突入することができなかつた。そこでドイツは三時間の餘裕を與へて降伏を勸告したが、これを拒否されたので、爆撃機五十機で二十分の後にはロッテルダムの三分の一を廢墟としてしまつた。マデノ線が突破され、五月二十日から二十四日までに亘るカンブレの戦車大遭遇戦は戦史未曾有のものであつたが、これを撃滅し去つたドイツ軍に對する空中協力は、まさに歴史的なものであつた。數千臺の聯合軍の戦車が、ドイツ戦車を挾撃せんの態勢をとつた。このときドイツの急降下爆撃機は、一編隊が終れば次の編隊がといふやうに間斷なく聯合軍の戦車群を反覆攻撃し、つひにその活躍の餘地をなからしめたものであつた。

五月二十八日、ベルギーが降伏して、敗慘の聯合軍はダンケルクから英本土への

逃避作戦に移つたが、こゝでもドイツ急降下爆撃機の活躍は物凄じばかりで、全く殲滅的打撃を與へたことは周知のことである。この白蘭戦にドイツの使用した爆撃機は三千五百機に及ぶもので一方的であつた。

ダンケルク附近の包圍殲滅戦が一段落を告ぐると、ドイツ空軍は敵に息をつく間も與へず、六月三日、大舉してパリに空襲を行ひ、フランス空軍に對して一大鐵槌を加へると共に、パリ市民を恐怖の底に投じたのである。

この日午後一時十五分から二時二十分に亘る空襲では、八千米から九千米の高さで約三百機のドイツ爆撃機が西北方の空から太陽を脊に負つて侵入、焼夷弾、音響爆弾、強度爆裂爆弾等約一千發を投下した。かくて追撃に追撃を重ねたドイツの一部隊は六月十三日の夜パリに無血入城を行ひ、翌十四日には全部隊が歩武堂々パリーの凱旋門をくゞつたのである。

ドイツは、フランス攻略後七月中旬から英本土東南地區の重工業地帯に對して

爆撃を開始した。しかし、これは未だ本格的なものではなかつた。英本土爆撃は決してこれが最初ではなく、一九三九年九月三日、英獨の國交斷絶以來、間歇的に獨英兩軍共に本國爆撃を行つてゐたので、特に、一九四〇年三月十六日、ドイツ爆撃機はイギリス艦隊の基地スカバフロウの大空襲を敢行したが、これはその戦果と共に偉大なものであつた。

八月五日、ヒットラー總統はベルリンに凱旋し、全ドイツ國民の熱狂的大歓迎を受けたが、彼は、その日の内にゲーリング空相その他陸海軍の首脳部を集めて重要會議を開いた。即ち、英本土上陸敢行か？ ロンドン空襲か？ 全世界はいつせいにその神經を緊張させたのである。果然、七日から空軍は活潑な動きをみち、數百機の大編隊が一日に數回リレー式にスコットランド地方とプリストル地方に飛んで猛爆撃を開始して、いよ／＼本格的に英本土攻撃の火蓋が切つて落された。

八月十四日には、クロイドン飛行場が襲はれ、翌十五日には、つひにロンドン上空に獨機一千機以上の姿が現はれて、文字通り天を掩つたのである。ドイツ爆撃機の大襲撃は、この以後ますます／＼さかんとなつて、ロンドンを初め、バーミンガム、ドーバー、ポーツマス、サザンプトン、クロイドン等、いたらぬ隅なく爆撃の的となつた。しかし、イギリスもブレンバウムやウエリントンのやうな優秀爆撃機を持つてゐるのだから、いかに受身とはいひながら、ベルリン空襲を行はぬ筈はない。八月だけでもベルリンに對しては七回、フランフルトに五回、ハンブルグには七回、その他軍需工場、製油工場、飛行機工場等を襲つた。しかし、完備された防空施設に大した効果を擧げてゐない。その上にドイツ軍はフランス西海岸に基地を持つてゐるから、ロンドンまでは僅々百五十機から二百機であるのに較べて英本土からドイツまでは何としても八百機から九百機以上も飛ばなければならぬから、したがつてその行動を制限され、ドイツ空軍がロンドンに與へ

たやうな効果は望めないのである。

また今次大戦はじまつて以來の大規模な空襲は、一九四〇年十月二十六日の午後六時から開始されたドイツ爆撃機のロンドン空襲であるが、これは二十八日の午前七時まで續行され、實に三十七時間といふ長時間の空襲記録で戦史未曾有のものであつた。なほ、翌十一月の一ヶ月にドイツ爆撃機が英本土に投下した爆弾の總量は、焼夷弾を含まないで六千七百四十七噸であるが、これは前大戦においてイギリスがドイツ國內及び戦線に投下した三ヶ年間の總量六千九百四十二噸に匹敵するものであつた。一九四一年四月八日夜から九日の朝にかけて、ドイツ爆撃機は八時間に亘つてロンドンの空襲を行つたが、この八時間の間に投下した爆弾の總量だけでも七百噸の多量に上つたのである。

なほ、一九四〇年十一月中に英本土攻撃に當り、二十三回の都市爆撃を行つてゐるが、これを投下彈總量から通算して考へてみると、都市（ロンドン、バーミン

ンガム、サザムプトン、コヴェントリー、リヴァプール、プリストール、ブリマウス）住民は、人口十人當り一回約四百六十瓦の破壊彈（ロンドンを除外した場合）は約八百四十瓦の洗禮を受けてゐるのである。この彈量は、人口六百五十萬の東京市に當てはめると約三百噸（五十匁彈にして六千個）を一舉に投下したのに相當する。いま東京市に五十匁彈六千個を投下されたと想像したゞけでも肌を粟立つのを覺へざるを得ないであらう。

コヴェントリーは有名なスピットファイヤ飛行機工場の所在地であるが、一九四〇年十一月十四日から十五日の朝まで、たゞ一回の爆撃で五百三噸の雨を浴びた。これを同市の十九萬四千百人に割つてみると、一人當り二匁六百瓦となるのである。その攻撃法は、先づ破壊彈の投下部隊が通り魔のやうに攻撃し去ると、續いてエレクトロン焼夷弾のみを搭載した爆撃機隊が攻撃する方法をとつたと傳へられてゐるが、これはイギリスのやうな石造家屋に對しての攻撃方法であるが

若し、ロツテルダムとか、或は、わが國の都市のやうに破壊彈の必要の尠いところではどうであらうか。

戦火の波及が北阿及びバルカンに飛び、ユーゴ、ギリシヤ兩國の敗退に續き彼のクレタ島攻略では、終始、空軍をもつて攻略したといつても過言ではなかつた。同島及び附近周邊の制空權が獨伊空軍の掌握する所となると、英海軍の活動は全く封ぜられ、しかも急降下爆撃機の猛攻によつて、巡洋艦七隻、驅逐艦十一隻、快速艇七隻、潜永艦四隻が撃沈せられ、他に主力艦二隻と航空母艦一隻、或は、巡洋艦や驅逐艦等が損傷を受けたのである。

一九四一年六月二十二日、この日は眞に突如ドイツがソ聯に對し宣戰の布告を發すると共に、得意の電撃戰を開始した日である。ドイツはソ聯の寢込みを襲つて數千の爆撃機を出動せしめ、先づ、全國の主要都市に猛爆を加へ、その第一日には、キエフ、サン・セバストポール、ラトヴィヤのソ聯空軍基地であるウイン

ダウコヅノ、オデッサを爆撃し、翌二十三日にドイツがレニングラードを四回に亘つて空襲すれば、二十四日にはソ聯側でもドイツのコンスタンツア、ガラツ、バルチック、バザルヂクを爆撃するといふやうに、爆撃戰の應酬が開始されたのである。

ドイツ爆撃機 Moskva 空襲の最初は七月二十一日のことであつた。八月七日アメリカが油槽船四隻をもつて航空用ガソリンをソ聯へ送る旨の發表をしたその夜、ソ聯機は初めてベルリンの空に現はれて爆撃を行ったのである。爾後、ドイツ機甲部隊の進攻に相呼應する壓倒的なドイツ空軍の活躍によつて、スターリン政府は既に首都を捨て、いまや赤都 Moskva の周邊にドイツ軍は殺倒してをり、その陥落は時間の問題とされてゐるのである。

一方、注目すべきは、ドイツ空軍が強力なイギリス艦隊を向ふに廻はし、その經濟の補給路を遮斷封鎖するために通商路の破壊に任じてゐることである。その

封鎖線は、ノルウェーとフランスのブルターニュ半島の兩方面から、アイルランド西方大西洋上五百乃至七百軒の海洋上に亘るものであるが、ドイツはUボートやEボートと呼應しての協同作戰をもつて對英經濟逆封鎖を敢行してゐることはいふまでもない。

ドイツは、大戰の勃發以來一九四一年五月までに、一千二百九十一萬七千噸に上る多量の艦船を撃沈し、開戦の年の九月から翌年六月までの間には、毎月十萬噸乃至二十萬噸に上り、大破その他損傷を蒙つた艦船の數も亦おびたゞしい數に上つてゐる。そして、このうち爆撃による撃沈率は、大體、二十五パーセント内外の高い率を示してゐる。

要するに、以上は今次大戰におけるドイツ空軍を中心とする爆撃戰の概觀であるが、その規模といひ凄絶さといひ、また技術的な進歩の瞭目的なことは、前大戰當時の經驗をもつては、夢にも想像でき得ないものである。ドイツ空軍は都市

空襲に際して、急降下爆撃のほか一萬米以上の高々度をとつてゐるが、これに對する優秀な酸素吸入装置、並に、驚異的な爆撃照準具を持つてゐることが想像されてゐる。

都市爆撃の發達にともなつて、防空手段の發達も亦みのがすことのできない問題である。日支事變では、わが空軍を射撃し來つた蔣軍の高射砲は最初二千米程度であつたといふが、最近では七、八千米の高度へ正確な射撃を送つてくるようになった。これは射撃術の進歩によるものであるが、蔣軍にしてなほかくの如き有様であるから、前大戰以來の經驗を持つてゐる英獨等の防空火器の發達は全く前大戰に比して雲泥の相違をきたしてゐることはいふまでもない。また、大舉して常に數百機の翼で天を掩ふ空襲に對する防空火器の數も亦これに匹敵し、ロンドンを中心に設置された高射砲の數だけでも約三千門といはれてゐるのである。

ABC Dの爆音と東亞制空權

米國の對日攻勢と敵性航空路

世界はいま樞軸國家と反樞軸國家群との二つに岐れて世界爭覇のための決戦を試みる運命に置かれてゐる。したがつて國際航空路も亦その性格が二つに分列し、しかも航空路は世界爭覇戰の強力な武器としての役割を演じるにいたつたのである。こゝに東亞を圍む國際航空路は、顯著にその特性を發揮しだしたのである。

即ち、太平洋航空路の性格が一變するにいたつたのは、わが皇軍の佛印進駐と日獨伊三國の軍事同盟の締結が一つの轉機となつたことを肯定しなければならぬ。太平洋における樞軸國家たる唯一の日本が堂々たる實力をもつて進軍を試み

る、といふ嚴然たる事實は、太平洋に利害を有する反樞軸國家群が著しい脅威を感じ、最初は重慶政府に對する小手先きの援助で牽制を試みようとしたが、つひにABC D包圍圈なる反日共同戰線を結成して、わが國に對して露骨な挑戰的對度を示すにいたつたのである。

今次大戰の勃發直前までにおける西南太平洋方面の航空路は、英、佛、獨、蘭の亞歐航空路、並に、米の太平洋航空路が入亂れて互に鎬を削り、多彩な國際航空爭覇戰が繰り展げられてゐたのであるが、大戰の進展にともなつて、これ等の航空路は俄然外貌を一變すると同時に、その性格にも一大變化をもたらしたのである。

ドイツは、戰爭勃發と同時に、開設後間もないベルリン—バンコック線を中止するの己むなきにいたり、フランスも亦一九四〇年六月の單獨媾和まで、マルセイユ—香港線を維持してきたが、屈伏後はドイツと同じく休止の己むなきにいた

つたのである。そして、その後は、僅に佛印内において、河内—西貢間の航空路を維持して餘喘を保つてゐるだけである。

イギリスは、これに對し戦争勃發當初からイタリヤの參戰、フランスの單獨屈服にいたるまで、英濠線ならびに香港線を維持してきたが、更に、一九四〇年四月には、英濠線の終點であるシドニーから新西蘭のオークランドにいたるタスマニア海横斷航空路を開設させて、英本國から新西蘭に達する二萬三千軒に亘る航空路を經營してゐたのである。

しかし、イタリヤの參戰後は、英本國—埃及間の航空路が運航不能に陥つたので、己むなく英本國—南阿聯邦線と英本國—濠洲—新西蘭線とを連絡した航空路即ち、南阿聯邦のダーバンから北上して埃及のアレキサンドリアにいたり、同地から印度—馬來—濠洲に出で、新西蘭のオークランドに終る馬蹄型航空路に変更し毎週一往復の定期航空を維持してゐる。

オランダは、大戰の勃發後、蘭印航空路の起點をアムステルダムからイタリヤのナポリに変更して業務を繼續してゐたが、イタリヤの參戰後は、イギリスと同様に地中海の運航が不可能となつたので、再び始發點を地中海東岸のバレスタインのリダに移し、現在では、同地からパタゴニア及びシドニーにいたる航空路において一週一往復の運航を実施してゐる。

かうして樞軸航空路が全滅してゐるのに反し、反樞軸國家の敵性航空路は、假令、本國とは直接に連絡を失つてゐるにも拘はらず、いまなほ太平洋に對する航空路の運航を保持してゐるといふことは注目しなければならぬ。しかも、この英蘭航空路は戰前において猛烈な競争を續けつゝあつたのである。それがいまオランダ航空路はイギリス航空路の補助的役割を演じつゝ、両者が完全に一體化してゐるわけである。

一方、アメリカの太平洋航空路は、大戰の影響を蒙ることなく、かへつて益々

複雑性を加へながら充實をみてゐるのである。日支事變の勃發と我が大東亞共榮圈建設事業に對する進展、加ふるに今次大戰の勃發以來、アメリカは、次第に樞軸勢力打倒の旗幟を鮮明にし、大西洋においても南米においても樞軸航空勢力の一掃に狂奔し、太平洋では次第に露骨な敵性を發揮して對日包圍、對英蘭支積極的援助の航空路政策を強化しつゝ今日にいたつてゐる。

先づその對日北方包圍線をみれば、一九四〇年六月、シヤトルからアラスカのジュノー、フェアバンクス、ノーム、又はベセルを連ねる米本土—アラスカ間の直通航空路を設定したのであるが、將來はソ聯との連絡をも豫定する我が國を北方から牽制する意圖によることはいふまでもない。

轉じて翌七月には、サンフランシスコから新西蘭のオークランドに達する約一萬三千軒の南太平洋航空路を開設して、南太平洋におけるアメリカの國防線を確立したのである。サンフランシスコ、ロスアンゼルス、ホノルル、フェニックス諸

島のカントン、佛領ニューカレドニアのヌメアを経てオークランドにいたるのが南太平洋航空路である。この間の所要日数は五日間で、隔週一往復が實施され、七十四人乗のボーイング・クリツパーが使用されてゐる。

この航空路は、オークランドで南阿のダーバンからくるイギリスの馬蹄型航空路と結び、濠洲、蘭印、馬來半島に通じ、サンフランシスコから香港にいたる對日包圍線の第一線航空路が一朝有事の際、わが空軍によつて切斷された場合、英蘭航空路と共同して對日包圍の第二線を確保することができるといふ點で重大な意義を持つてゐるのである。

アメリカは、かくして太平洋の北と南とに航空路を設定し、その最もふるい歴史を持つた中央航空路、即ち、ハワイ、ミッドウェイ、ウエークを経てマニラにいたる線との太平洋航空路によつて、太平洋の航空制覇の態勢をとつたのであるが、わが軍の佛印進駐及び目獨伊三國の軍事同盟の締結以來は、西南太平洋の危

機となして、英蘭の反樞軸國家を積極的に語らへ、自らも亦西南太平洋における空のA B C D對日共同戦線の陣頭に駒を進めきたつたのである。

アメリカの西南太平洋における前進基地として自他共に許されたフィリッピンのマニラは、米系航空路によつて、直に、香港ならびに重慶に連絡することが可能であつた。これに反してイギリスの極東根據地たるシンガポールと蘭印の首府バタヴィアへの航空連絡は、重慶からラングーンを経由しなければならないといふ不便があつた。のみならず他方においてイギリスは、わが軍の佛印進駐後、バシコック―香港線を停止するの己むなきにいたつたので、シンガポールと香港との高速度連絡も多大の困難に直面しなければならなかつたのである。

この打開のために、アメリカは一九四一年五月、新にマニラ―シンガポール線を開設して隔週一往復の運航を実施し、これと同時に、サンフランシスコ―香港線における従來の毎週一往復を隔週一往復便にあらためた。かくして、シンガポ

ールに對する直通航空路の實現は、西南太平洋における米、英、蘭における對日共同戦線の結成強化に際し、その意義は極めて大なるものがあつたが、去る十月にいたつて、アメリカは同航空路の政治的、軍事的重要性にかんがみて、隔週一往復から毎週一往復とし、同時に、マニラ―香港間も隔週一往復から毎週二往復に増加して、米英、米支の連繫を更に一層緊密化するにいたつた。なほ、一九四〇年の秋以來、バタヴィア―マニラ間には非公式ながら蘭印との定期航空路が開通してゐる事實があり、これによつて西南太平洋における英米蘭を結ぶ三角航空路は完成したものといつて差支へないのである。

一方、支那大陸における敵性航空路は、なほ依然として米支合辦の中國航空公司線が二大援蔣航空路を受持つてゐる。一は香港で太平洋横斷線と連絡して重慶にいたる重慶―香港線、他はビルマのラングーンで英蘭航空路と結ぶ、重慶―昆明―ラングーン線とである。かくして重慶政權下の支那航空路は全くアメリカの

獨占に歸し、こゝにいはいゆるA B C D對日包圍陣の最左翼を受持つてゐるのである。

わが南進航空路と東亞制空權

A B C D合作の航空路が今やアメリカの統率下に完全な一體となつて、北から南から中央から我が國を壓迫する一大包圍網的存在となつた。この反樞軸航空路の敵性こそは、わが大東亞共榮圈建設に對する大なる障礙の一つであることはいふまでもない。自然、大東亞共榮圈確立の前提として、これ等の反樞軸合作航空路に對抗する航空路、いひかへれば太平洋における我が國の生存權を強調するに足る東亞の利害權を握ることが不可欠な要件である。

いま最も吾々の注目しなければならぬ反樞軸航空路に對抗する我が國の南進航空路は、東京—バンコックを結ぶ日泰航空路、並に、横濱—ハヲオを結ぶ南洋

線の二本と、昭和十六年十一月に結ばれた日葡航空協定によつて開始されるにいたつたパラオから葡領チモールにいたる南進線とである。前者は昭和十五年六月後者は昭和十四年四月に開設され、その歴史は淺いにも拘はらず、この西南方航空路は南方共榮圈への二大動脈として重要な意義を持つことはいふまでもない。友邦タイは、東亞に存在する國でありながら、我が國からバンコックへの連絡は二週間以上を要したのである。一方、亞歐航空路を有した英佛蘭等は、僅か三日乃至四日で連絡することが可能であつた。この事實によつて考へれば、タイは東亞の一國でありながら、時間的にはヨーロッパ的存在であつたといふことができるであらう。日泰航空路の開設は、この矛盾を打開してタイを再び東亞のタイに引戻したのである。

いまや東京—河内間が二日、東京—バンコック間が三日の航程となつた。この距離の時間的短縮は、著しく我が國とタイ、佛印とを緊密化し、經濟、外交、軍

事の凡てに極めて重要な役割を演じてゐる。たとへば、泰佛印の國境紛争に際して、わが居中による東京會談が迅速且つ圓滿に妥結され、或は、日佛印共同防衛の協約が急速に成立したといふやうな歴史的成功的背後には、この日泰航空路の黙々たる然も偉大な貢献があつたことを銘記すべきであらう。

一方、南洋航空路は、内地と我が南洋とを緊密に連絡して植民地の統治上大なる寄與を行つてゐるばかりでなく、これが米領グアム島附近で對日包圍の第一線であるアメリカの太平洋横斷航空路を切斷してゐるといふ點に重要な軍事的意義を持つてゐるのである。なほ昭和十六年四月には、本航空路の支線としてパラオから東方のヤルトにいたる島内線が開設され、赤道以北の我が南方海上の空域は完全に我が制覇の下に置かれるやうになつたのである。

かういふ趨勢下にあつた我が南方航空路は、更に、南進開拓の希望の矢として赤道を越えたのである。即ち、南洋航空路の終點パラオから葡領チモール島の首

府デイリーにいたる定期航空路開設の協定が結ばれ、隔週一往復の運航をみるにいたつたのである。これによつて、横濱、バラオ、デイリーを結ぶ約六千六百軒の大航空路は、東京から佛印を経てバンコックを結ぶ六千三百軒の日泰航空路と共に缺状をなして、南方共榮圏の大動脈を形成し、蘭印の背後において反樞軸國家の對日包圍第二線航空路に強大なる威壓を加へるにいたつたのである。

かくて空の日滿支一體を結ぶ共榮圏航空路と共に、わが南方航空路は堂々と太平洋上に反樞軸航空路に反撃態勢を整へて南進一途してゐるのである。大東亞共榮圏確立の第一線は、まさに大東亞共榮圏航空路による制空權の獲得にはかならないのである。

ABC D對日空軍の動向

重慶政權治下の支那奥地を陸の一大航空母艦たらしめて、わが國を後方から牽

制しようとする策動が開始されてから既に久しくなつた。ソ聯は獨ソ開戦の結果援蔣どころではなく、専ら參戰一途のアメリカが今日までの中心となつて、蔣空軍の再建につくしてきたことは周知の事實であらう。

昭和十六年の夏、比島空軍司令官のクラゲット少將がアメリカの意を受けて重慶に赴き、米空軍將校よりなる共同作戰本部の設定、米操縦士の重慶空軍參加、援蔣機數の決定（ボーイングB一七型爆撃機を含めて、五百から八百機）空軍建設に要する器材ならびに技術員の提供、支那奥地に増設すべき空軍遊撃基地の選定、或は、蔣軍操縦士の養成に對する協定をとげ、今日にいたるまで着々努力が續けられてきたのである。

これによつて、重慶の空軍志願兵二百名は既にサンフランシスコ南方の飛行場モフエットにおいて猛訓練を開始する一方、九月には百二十名の米空軍義勇兵が重慶に赴き、更に十月末百名のパイロットを含む五百名の空軍部隊が到着して訓

練を開始し、既に大部分はビルマ・ルート防衛のために服務を開始したと報ぜられてゐる。

一方、重慶、成都、江西、湖南の各地には、はやくから空軍基地の再建または新設が行はれてゐるが、これ等はいづれも長距離爆撃機の基地を目的としたもので、わが臺灣の對岸の位置する福建省龍巖にも建設中であることが最近においてわかつた。これ等の基地建設については、米國將校ジエームス・ヨイルリン大尉が當つてゐる。

かうして米支空軍の合作振りが進展してゐる一方、イギリスも亦香港防衛のため廣東省南部の空軍基地獲得に成功し、去る十一月二十二日に行はれた香港特別演習において重爆撃機十數機を空輸したことが報ぜられ、既に、常平、惠州、老隆にはイギリスの建設に拾はる空軍基地が設置されてゐる有様である。

かゝる英米の支那大陸における空軍基地の建設は、一朝有事の際、支那大陸に

おける自國空軍の據點たらしめる意圖にあることはいふまでもないことで、その戰略的價値は極めて重大である。アメリカの太平洋における最西端基地として我が日本に最も短距離にあるフィリッピンから、わが九州南端まで二千三百軒であるが、廣東省南部や江西省基地から長崎まで一千五百軒乃至二千軒であるから五百軒の距離を短縮することができるわけである。即ち、今日の爆撃機をもつてする爆撃圏内にその基地を前進することの可能を意味し、空軍基地を持たないに等しい香港、或は、フィリッピン防衛を中心として、東支那海、及び、南支那海における海空權の見地からみても、わが防衛上もつとも重大視さるべき戰略的價値を有することを直視すべきである。

かくして支那における重慶政權治下の各地を一大航空母艦たらしめんとする一方、南西太平洋における對日包圍陣の強化が今日まで着々と進められてきた。しかるに來栖大使が希望の矢となつて太平洋を飛び、その會談の半ばにも達しない

十一月末から十二月一日前後をかけて、シンガポール、マレー、フィリッピン、ビルマ、蘭印の對日包圍陣を形成する紐帶は、俄然、非常事態の宣言を行ひ何を血迷つたものか決戦態勢をとるにいたつた。

かねてイギリスはポツダム空軍大將を極東軍司令官に任じ、海陸の防備と共に空軍の増強をはかつてゐたが、既に本國の防衛に手一杯である關係上、アメリカに援助を求めるのは濠洲空軍の増援を受けて今日にいたつてゐる。アメリカのコンソリデイト爆撃機數十機がハワイを中繼地として太平洋を横斷して、シンガポールへ送られたのはこの夏のことであつた。

わが臺灣とは一夜帯水の間にあるフィリッピンは、元々、アメリカ極東艦隊の根據地としての重要基地であることはいふまでもない。したがつて、空軍の増強一途を辿つて今日にいたつたことは、敢て不思議とするに足りないのである。比島空軍にはボーイングB一七型すなはち「空の要塞」の配備が豫て傳へられてゐる

るところであるが、これをもつてすれば、臺灣、四國、九州、大阪方面に對し十分な爆撃行動半徑内にあるわけである。

フィリッピンにはマニラを中心としていたるところ空軍基地の建設が行はれてゐるが、臺灣に最も近い位置を占める飛行場は、昭和十六年四月に完成した呂宋島北岸の要地アバリーで、その南方八十七軒のツィガラオにも基地ができてゐる七月現在に於ける比島極東空軍の軍用機は一千機と報ぜられてゐるが、第一線機として活躍し得るのは二百五十機とみられてゐる。

フィリッピンにおける極東空軍は、空軍總司令官ブリアトン少將によつて指揮され、爆撃隊長レ・ユーバンク中佐、驅逐隊長ヘンリー・クラゲット准將、參謀長フランシス・ブランドイク大佐、作戰及び豫備訓練副參謀長兼通信及び情報副參謀長チャールス・コールドウエル少佐、兵站及び基地司令H・H・デオージ中佐といふのが、その首腦部の陣容である。

一方、濠洲ではシンガポールを防衛の第一線とし、同地に對してでき得るかぎりの援助を行つてゐるが、殆ど皆無に等しい海軍力を補強するため空軍に重點を置き、國土防衛を主眼とする一連の空軍基地が既に完成されたマクエウエン空相が公にしてゐる。しかし、その詳細は不より嚴秘に附されてゐるところで知るによしもないが、濠洲大陸を取圍んだニューギニアをはじめ大小無數の諸島嶼が濠洲防衛の外郭陣地を構成してゐることは想像に難くないのである。これによつて、濠洲が長距離海上飛行機に重點を置いてゐるのは、廣汎な水域に亘つて危険を未然に探らうといふ趣旨にはかならないことがわかる。

また、濠洲の平原は地勢的に廣大であるから、國內には無數の然も優秀な飛行場が提供されるわけである。濠洲空軍の訓練を行ふ中心地はクイースランドにあつて、最近四百五十萬ポンドの豫算で完成したものである。なほ、濠洲政府は約七百人の要員を遠くカナダのローデシアに送つて航空訓練を行はしめつゝあるが

一九四一年中に三千七百萬ポンドを支出して空軍の増強を企圖し、一九三二年には僅か三十二機だったのが、最近の第一線機は三百機といはれ、本國と同様に専らアメリカ製飛行機に依存し、自らも亦製作に狂奔してはゐるがなか／＼思ふやうにはいかないのが事實である。

蘭印も亦アメリカ依存によつて空軍を組織してゐる仲間である。最近、濠洲に提供されてゐるカタリナ哨戒爆撃艇が米人操縦士の手によつて空輸され、十一月二十二日にも數機が到着したと報ぜられてゐる。蘭印空軍は、これによつて沿岸の哨戒用に使用、空の防備を強化しようといふわけである。一九四〇年現在で、蘭印には、ジャバア島に四十餘ヶ所、スマトラに二十餘ヶ所、そのほか點々と散在するものを合計して約九十ヶ所の陸上飛行場があつた。爾後、この數は相當に上つてゐるであらうことが想像できる。また、水上基地としては、いたるところの河川や湖沼が利用され、そのほか靜穩な海面の利用によつて全島いたるところ

に設けることが可能なわけである。

一九四〇年、同地方を旅行した大日本航空會社の本田調査課長の談によれば、當時、蘭印の飛行場には着陸防止施設がほどこされ、不斷使用しない飛行場は全部掘りかへし、ちよつとした廣場には塹壕を掘つて飛行機の着陸を防止する方法が講ぜられてあつたといふことである。これ等は兒戯に類することの一つであるが、英米勢力とその援助を過信する蘭印當局の對日一戦を辭せぬといふ豪語を思合はせるとき、彼等の認識不足は笑止といふよりは哀れを催さずにはいられないのである。

いづれにしても、A B C D包圍陣を形成する空軍戦備の概観は、ざつと以上の通りであるが、その目的の中心は防衛一點張りであつて、はたしてよく積極的に我が國土を襲ふにいたるか否かは、アメリカ海軍の太平洋動勢ならびに同國空軍の検討に俟つてかんがへなければならぬ。

十一月十四日、權威ある筋の情報として新聞紙上に發表されたA B C D空軍陣營の第一線機は、マレー二百五十機、ビルマ五十機内外、印度二百機、フィリッピン二百五十機、蘭印三百機、濠洲二百五十機、新西貢百機、合計一千三百五十機であるが、わが陸海の精銳空軍の前には、鎧袖一觸のほかないものである。

太平洋の空とアメリカ空軍

敵性A B C D包圍陣の紐帶が、いまにはかに非常事態を宣して露骨な蠢動を開始しても、それが直に我が國土を脅かすに足るなものではない。むしろわれわれは眼を太平洋の彼岸に轉じて、敵性の本源に對する検討こそ必須である。英米の極東艦隊、或は、A B C D包圍陣の空軍、この二つの勢力の消長は、最早、アメリカ一國の双肩にかゝつてゐるわけである。ではアメリカの太平洋における空軍の動向はどうなつてゐるのか、次にそれを検討してみよう。

先づ、北にはアラスカからアリューシャン群島を結ぶ海空軍基地の一環をもつて、わが北邊を窺ふことは既に述べた。この方面の基地は、わが國を狙ふ場合の大圏コースによる最短距離にめぐまれ極めて重視されることはいふまでもない。しかし、この方面の進攻作戦は天氣に支配される關係で十分な機能を發揮することが困難であらうとされてゐた。が、今日の如く亞成層圏爆撃機の出現とこれが第一線機への採用は、最早、同方面の濃霧も氷結も顧慮の種とはならなくなつた。そこでこの方面に對する關心の稀薄をおそれなければならぬのである。

次に、米當局は、サンフランシスコをもつて太平洋岸の防備第一線たらしめようとしてゐる。このためには目下大車輪で空軍基地を各所に新設中であるが、先づ、アラメダの海空軍基地の補助的飛行場として、サンフランシスコ灣内五ヶ所に新飛行場を設け、他にも更に五ヶ所を設定したと報ぜられてゐる。これによつて同灣の附近には、アラメダを含めて十一ヶ所に海軍飛行場が新設されてゐる。

一方、陸軍側では、同灣内のハミルトン重爆基地、並に、サンニブエル飛行場の大擴張を行ひ、サンウオーキン平原、スタクトン地方には訓練用飛行場を二ヶ所に新設、カルフォルニア灣のペーカリス附近にも二ヶ所の飛行場が設けられてゐる。

この太平洋岸における第一線はともかく、太平洋正面の武装こそ問題である。

これは前にも述べたやうに、中央航空路であるハワイ、ミッドウエイ、ウエークグアム、マニラとの婉々一萬二千八百四十三軒に及ぶ飛石傳ひのコースが、アメリカの太平洋を貫く空中武装である。と共に、この一線はハワイからカントン、ヌメア、オークランドへ伸び、前者が北方の大圏コースと共に我が日本に對する包圍圏とすれば、後者は我が南洋委任統治區域に對する包圍環を構成してゐるのである。しかも、この航空路は、蘭印、濠洲、香港、シンガポール、重慶、或は新西貢に通ずる米の進攻基地となり、イギリスとの共同防衛環、即ち、A B C D

包圍陣形の構成をなすものである。

眞珠灣カネオへの空軍基地は大擴張され、ジョンストン、バルミラ、ハウラント、ペーカー、カントン、サモアなどは完全な武装を持った空軍基地として、米海軍自慢のコンソリデット哨戒爆撃艇が間斷なく哨戒飛行にしたがつてゐるのである。今日までアメリカが太平洋空軍基地強化のために投じた金額は、既に八億弗を突破してゐると傳へられてゐることをもつても、その施設のほどが如何なる程度のものであるかを想像することは困難ではないのである。

特に、ハワイの武装強化は活潑を極め、昭和十六年五月十三日、合計二十一機のボーイングB一七D型「空の要塞」が、カルフォルニアのハミルトン飛行場から空輸され、十四時間の後ハワイのヒツカム飛行場に車輪を印したのは、いかにやくから太平洋の空中武装に狂奔してゐるアメリカであつたかを窺ふに足るものではないか。當時、アメリカは、これをもつて新國防計畫の成果を誇示する最

初の劇的ゼスチュアとなして大々的に報導したのであつた。

かういつた陸上基地の動向のほか、われ／＼は海洋の空中制覇をかんがへる場合、航空母艦の存在を忘れるわけにはいかないのである。しかし、航空母艦は艦隊に随伴するもので、單獨には活動がゆるされるものではない。したがつてアメリカの航空母艦がいかなる場合に、その艦載機をして我が國土の空を窺はしめるかの問題は、すくなくも我が艦隊の存在するかぎり先づ九十九パーセント不可能であるとかんがへてよいと思ふ。

アメリカの航空母艦保有量は二十三隻の三十萬噸であるが、一九四〇年九月の二大洋艦隊計畫によつて、なほ七隻の航空母艦と水上機母艦とが追加建造されることになり、既に建造中に屬してゐるとみられる。なほ、最近の情報によれば沿岸防備基地の整備を急速に進める一方、多數の商船が續々航空母艦に改装されつゝある。

さて、アメリカ空軍の大擴充は、スターク案によつて必死の努力が續けられ、一九四一年六月までに、一萬機の飛行機と操縦者一萬八千五百人を目標に進められてきたが思ふようにはいかなかつた。しかし、スターク案最終の目的は年産五萬機で、四二年の中頃までには三萬六千機まで漕ぎつけるといつてゐるが、實際には製作工場における労働爭議の頻發で豫定通りの進行が疑問とされてゐる。この年産五萬機といふのは、一九四三年末までの差迫つた問題で、常備陸軍三萬五千機、海軍一萬五千機の完成が目的であるから、なか／＼容易なことではないのである。

さて、米空軍の飛行機が如何に急激に増加しようとも、それがそのまま全部我が日本の脅威となるものではない。即ち、援英共同作戰のためには、太西洋方面にも大半を割かなければならないのであつて、われも亦これに應じるためには血の努力を盡して遺憾なきを期してゐるのである。要は太平洋に戦火飛散るの日に

日米艦隊の制海権争覇の後、はじめて空襲下の脅威を生じるわけである。しかりとすれば、わが無敵海軍の精銳が太平洋に睥睨するかぎり安泰とまではいかないまでも、さう易々と爆撃機の爆音を聴き且つこれを邀へることはないのである。しかしながら、既に蔣軍の飛行機でさへ嚴重な監視の眼をくゞつて九州の空に現はれたことを想起されなければならない。今日なほ爆撃機の性能を論じてゐる時代ではないのである。近代戦の特徴は、戦線後方に對して如何に物心共々大きな損害を與へ、國民士氣の沮喪をはかることによつて戦捷をはやめるかにある。だとしたならば、空襲下國民の心構は、爆彈の雨に敢然と突立ち、いかに突進してその損害を最少限度に止めるかにある。敵が與へんとする十の損害を一に喰止めることが國民に課せられた防空の要諦である。しからば敵の十の攻撃に對し九の勝利をこゝに獲たことになる。われ／＼は敵を知つて己を顧みると共に、敵在るを憂へず、備なきを憂ふるといふ古語に傾聴しようではないか。

對米英宣戰布告と國土防衛

太平洋決戦の火蓋と大空襲

昭和十六年十二月八日午前六時、「帝國陸海軍は、同八日未明、西太平洋において米英軍と戦闘状態に入れり」臨時ニュースは、歴史的な太平洋決戦の開始をかく簡潔に傳へた。しかし、この簡潔な一片のニュースには、何と千萬言を織なす大日本帝國の複雑な感情が盛られてゐることであつたらう。太平洋平和維持に對する九ヶ月に亘る我が方の忍耐は、つひに爆發したのである。

天皇陛下におかせられては、長くも午前十一時四十分宣戰布告の大詔を賜ひ、一億國民の向ふところは儼として定まつたのである。

ときにはやくも、わが陸海軍の精銳は勇躍して起ち、こゝに太平洋は一瞬にして「平和の海」と呼ばれきたつた相貌を變へたのである。いまわれ等は宣戰の大詔を拜し、恐懼感激に堪へぬと共に、肅然として満身の血のふるへるを禁じ得ないのである。いまや肇國三千年のほこりに輝く皇國の隆替を決するの秋、一億國民が一切を國家に捧ぐべき日はきたのである。

八日未明、決然起つた皇軍の戰鬪開始は、まさに電撃的であると共に、その作戦の雄大なことは人類五千年の歴史はじまつて以來のものであつた。しかも、近代戰常識の教へるところにしたがつて、太平洋制空權の獲得戦をもつてはじまつたのである。

かねて西南太平洋の敵性航空路とその中間基地は、名を平和の商業航空路に籍りた進攻基地であると共に、A B C D包圍陣に對する空中補給路としての役目を帯び、日獨伊樞軸國家の同盟、並に、南京政府の樹立以來、露骨な敵性を發揮し

て、これに武裝を整へつゝ、我が方に對する威迫的態度を示して今日にいたつたことは既に述べた通りである。

先づ、ハワイは米の太平洋前衛線として陸海空の一大基地であつた。太平洋艦隊の艦隊航空隊のほか、その陸海軍航空隊は、ヒツカム、ホイーラー、リューク・フィールド、並に、一千三萬弗を投じて昭和十六年二月に完成したカネオ灣航空基地は、米の哨戒爆撃艇隊の根據地であつた。このほかハワイ島に三個、マウイ島に二個、カウアイ島に二個、ライナ島に一個の飛行場によつて攻防の態勢がとられてゐた。

更に、ハワイを中心に集結した米艦隊は、昨年末において八十一隻を算へ、三萬二千五百噸のコロラド號以下の主力艦十隻、九千五十噸のノーザンプトン號以下の巡洋艦十五隻、ラムソン號一千四百八十噸の驅逐艦以下五十隻、潜水艦及び補助艦艇多數よりなるもので、主力艦ならびに巡洋艦には各々數機の艦載機を有

し、驅逐艦ならびに大型潜水艦にも小型機の搭載を行つてゐることはいふまでもない。

このほか艦隊に随伴する艦隊航空隊は、三萬三千噸のサラトガ、一萬九千九百噸のヨークタウン、エンタープライズの航空母艦三隻が、各々八十機以上の艦上機があつたわけである。

かくの如き太平洋における米艦隊と共に、南方共榮圏の海には、フィリッピン及びシンガポールを根據地とする米英極東艦隊が、これまた艦隊航空隊を随伴し併はせて太平洋飛石傳ひの空軍基地をはじめ、A B C D 包圍圈を紐帶とする空軍勢力は、前にも縷説した通り、太平洋制空權の夢を狙ふものであつた。

こゝに先づ日支事變以來、歴戦手練の陸海航空部隊の精銳は、更に、このことあるを期して猛訓練を重ね、また我が航空工業の粹をほこる優秀な各種第一線機に腕を撫しきたつたのであるが、つひに猛鷲の太平洋に羽搏く日はきたつたので

ある。かくして、敵の一機だに跳梁するをゆるさぬ太平洋制空權獲得を目指して長驅空中爆撃戦の火蓋は切られた。しかして、緒戦第一日の一大戦果を見よ、われ等はいま平田海軍大佐の聲明こそ、微塵の誤りなきものであつたことを想起するものである。

ハワイ大空襲の戦果と歐洲戦の比較

わが帝國海軍が滿を持して放たなかつた矢が絃をはなれた。その猛然と立ち上つた瞬間には、かねてこのことあるを期して磨きに磨いた神鋒は燦たる光りを發揮し、先づ米海軍の太平洋上の最大據點ハワイに徹底的攻撃の火蓋を切つたのである。

この結果について、八日午後八時四十五分、大本營海軍部は、敵の戦艦二隻を一分間以内に撃沈、他の戦艦四隻大破、大型巡洋艦四隻大破、他に敵飛行機多數

を撃墜、撃破し、わが飛行機の損害は軽微なりといふ戦史未曾有の一大戦果を發表したのである。以上は、なほ、九日にいたつて二隻が追加され、米軍死傷三千、敵機二百乃至三百を撃墜したと外電は報じてゐる。わが海の荒鷲が、その緒戦劈頭をかざる一大戦果であるが、更に、敵の航空母艦（エンタープライズと推定される）一隻が、わが潜水艦の猛攻に撃沈せられたるものゝ如くであると報ぜられてゐる。

この一大戦果によつて、米の第一線主力は完全に、その大半の勢力を失つてしまつたのである。米英怖るゝに足らずとなす無敵荒鷲の本領はこゝに遺憾なく發揮せられ、昭和十二年八月、支那海の颱風を乗り切つた渡洋大空襲は世界陸目的であつたが、太平洋決戦の劈頭におけるこの空前の一大戦果は、世界列強特に相手國であるアメリカ國民の眼にいか映つたであらう？

空軍對海軍の一大決戦は、今次大戦の勃發と共に屢々行はれてきたところだ

が、その最初はノールウエー作戦において、制海權勝つか制空權勝つかの空海一大立體戦が演ぜられた。このとき英の大輸送船團は、ドイツの急降下攻撃を受け、一九四〇年五月三日、ドイツ急降下爆撃中隊のメーブスニ二等兵がナムソス附近の海上で英戦闘艦を發見、これをたゞ一發の爆弾で沈没せしめた。これは當時たしかに世界をアツといはしめた事件であつた。メーブスニ二等兵は、即日、その戦功によつてヒットラーの名により空軍中尉に任ぜられた。

これまで各國の軍事専門家の間では、「戦艦は飛行機を寄せつけない。飛行機が爆沈できるのは小型の艦船だけである」といふのが常識で、大體に、主力艦に對し二噸、輕巡洋艦に對し五百庇、商船五十庇の爆弾でなければ効果がないといはれ、その意味も爆沈にまではいたらないとされてゐた。

メーブスニ中尉の場合は、それが前部砲塔間の中間にあつた火藥庫に命中した幸運であつたにせよ、三萬六千噸のウォースパイット號型の大戦艦が、たゞ一發の

爆弾の命中で僅か三十一秒間に沈没したことは、實に世界の大問題であつた。

英佛聯合軍のダンケルク退却以後、ドイツが對佛作戰を敢行した一九四〇年の六月四日から二十二日にかけて行つた空爆により英艦船に與へた損害は、補助巡洋艦一、驅逐艦一、輸送船四〇を撃沈、巡洋艦三、驅逐艦一、輸送船二五を大破せしめ、五月十日から六月三日までに、潜水艦、驅逐艦、巡洋艦を含む四十九隻を撃沈破してゐる。

一方、ドイツの通商破壊戦が熾烈に開始されたしてから、アイスランド近海で英護衛船艦隊を發見、四萬二千噸のフツド號を撃沈、更に、主力艦キングジョージ五世號三萬五千噸に損傷を負はせながら、新手の英艦隊の追撃を受け、英航空母艦から飛出した雷撃機ソードフィッシュの放つた魚雷のため、つひに撃沈の運命をたどつたのは、ドイツ戦艦のビスマルク號であつた。しかし、これは空中魚雷攻撃の完全な成功ではなかつた。

第二次大戰の勃發後、昭和十六年五月末までに、ドイツが行つた艦船の撃沈噸數は、一千二百九十一萬七千噸と發表してゐる。このうちいかなる比率をもつて撃沈してゐるかを調べてみよう。

開戦當時より一九四一年一月末までの比率

潜水艦 飛行機 他の艦船

五三% 二一% 二六%

一九四〇年七月より同年十二月までの比率

飛行機 潜水艦及其他艦船

一八% 八二%

一九四一年五月一ヶ月間

潜水艦 飛行機 他の艦船

六四% 二九% 七%

開戦以來一九四〇年十一月五日までの撃沈總噸數

海上艦船による	一八一〇、〇〇〇
潜水艦による	三七一四、〇〇〇
空軍による	一六三八、二〇〇
合計	七一六二、二〇〇

右統計の比率

潜水艦	飛行機	他艦船
五二%	二三%	二五%
一九四一年五月一ヶ月		
潜水艦による	四七九、〇〇〇	
飛行機による	二一五、〇〇〇	
海上艦船による	五二、〇〇〇	

次に、ノールウェー作戦開始から昭和十六年七月末日までの艦船被害と飛行機の損害を比較してみると、六十機の損害で五十二隻を攻撃、六十機の損害をもつて二十六隻を撃沈してゐる。しかし、この數字は敵海軍を對象としてゐる全數字でなく、輸送船そのものが大部分であるから、わがハワイ空襲による戦果とは比較になるものではない。

ドイツの北阿バルカン作戦、ギリシヤ、ユーゴの進撃に際し、英艦船の四十萬噸がドイツ急降下爆撃機ならびに潜水艦及び軍艦の餌食となり、海と空との最も大きな決戦は、例のクレータ島攻略であつた。このときはイタリヤ空軍の協力もあつて、ドイツが同島周辺の制空権を掌握するや、英海軍は、巡洋艦七隻、驅逐艦十一隻、快速艇七隻、潜水艦四隻を撃沈せられ、凱歌は完全に空中に擧つたのである。

しかし、第二次世界大戦の勃發以來、戦闘艦の空中直撃による撃沈數は僅に一

隻で、今回わが海空軍の精銳が一舉に六隻の戦闘艦を撃沈破し、更に、大型巡洋艦五隻を撃破し、プリンス・オブ・ウェールズ、並に、レパルス號をも屠つたことは、まづたく史上空前の出来事であつた。もつて海空軍の眞價は、全世界を震撼せしめて餘りあるものであらう。

なほ、ハワイ空襲によつて生じた米軍の損害は、三千餘名の死傷者を出し、わが軍艦の砲撃をも加へ、ホノルル市街は猛火に包まれたと報ぜられてゐる。本空襲は全く敵の虚を衝いて勇敢に行はれた結果、敵がわが機の襲撃を知つたときには、既に市街、軍港、飛行場、或は、軍事施設の眞上に猛攻の態勢をとつてゐたとも傳へられてゐる。

一舉太平洋制空權の掌握

ハワイ空襲に呼應して、同時刻に決行された爆撃は、ウエーク、グアム、比島

(夜間空襲をも含む)、ダヴァオ、香港、シンガポールであつた。

こゝでも陸目的な戦果を挙げ、大本營陸海軍部八日午後九時の発表によれば、陸海軍航空部隊は緊密な協力の下に、フィリッピン敵航空兵力ならびに主要飛行場を急襲し、イバにおいて四十機、クラークフィールドにおいて五十乃至六十機を撃墜した。

一方、南支方面帝國陸軍航空隊は、八日早朝、香港北方の敵飛行場を急襲し、同飛行場にあつた十四機のうち十二機を撃破、午後も亦數次に亘つて空襲を行ひ、敵飛行場施設を徹底的に爆碎多大の戦果を挙げ、在香港の英米人を恐怖のドン底に叩き込んだ。また、陸軍航空隊も亦独自の行動をもつて、フィリッピン方面の要衝に對し、大舉空襲を行つて、多大の損害を與へたと報ぜられてゐる。

かくして陸海の空の精銳は、完全に敵の出鼻を叩き、マレー半島の奇襲上陸を敢行して、着々戦果を擴大しつゝシンガポールに迫つてゐるわけであるが、一應